Part 1

中学校の部

第1章

中学校と中学生の理解

1　中学校・中学生の状況と進路の状況

①　中学校の数、中学生の数

・2013年４月の学校数は、10,628校で、前年より 71校減少している。そのうち、私立は 771校（前年より５校増加）で、全体の 7.3% である（高校の場合、2012年度における私立高校の割合は 26.5%）

・生徒数は、3,536,201人（男子：1,808,906人、女子：1,727,295人）で、前年より 16,462人減少している。

・中高一貫教育を行う学校は、「併設型」（高等学校入学者選抜を行わず、同一の設置者による中学校と高等学校を接続する形態）が 319校（前年度より 10校増加）であり、「連携型」（簡便な高等学校入学者選抜を行い、同一又は異なる設置者による中学校と高等学校を接続する形態）が 172校（前年度より 2校減少）である。

・１学級当たりの生徒数は 28.8人、本務教員１人当たりの生徒数は 13.9人である。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年８月を基に作成）

【中学校の設置者別学校数】

（校）

区　分	計	国　立	公　立	うち分校	私　立	計のうち中高一貫教育を行う学校（再掲） 併設型	連携型
平成 15 年度	11, 134	76	10, 358	74	700	50	133
20	10, 915	76	10, 104	76	735	219	175
21	10, 864	75	10, 044	79	745	247	177
22	10, 815	75	9, 982	80	758	273	177
23	10, 751	73	9, 915	80	763	289	178
24	10, 699	73	9, 860	82	766	309	174
25	**10, 628**	**73**	**9, 784**	**81**	**771**	**319**	**172**

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

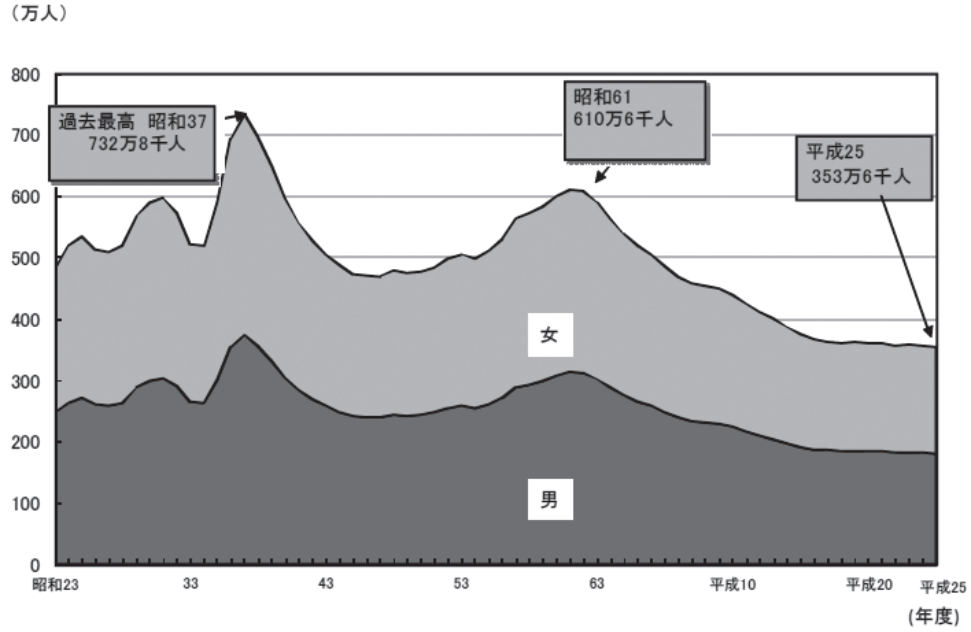
【中学校の学年別生徒数】

（人）

区　分	計	男	女	第１学年	第２学年	第３学年
平成 15 年度	3, 748, 319	1, 915, 040	1, 833, 279	1, 211, 515	1, 237, 042	1, 299, 762
20	3, 592, 378	1, 835, 204	1, 757, 174	1, 176, 243	1, 227, 410	1, 188, 725
21	3, 600, 323	1, 839, 139	1, 761, 184	1, 195, 134	1, 176, 890	1, 228, 299
22	3, 558, 166	1, 817, 273	1, 740, 893	1, 185, 116	1, 195, 493	1, 177, 557
23	3, 573, 821	1, 825, 801	1, 748, 020	1, 192, 817	1, 185, 091	1, 195, 913
24	3, 552, 663	1, 815, 641	1, 737, 022	1, 174, 041	1, 193, 010	1, 185, 612
25	**3, 536, 201**	**1, 808, 906**	**1, 727, 295**	**1, 168, 214**	**1, 174, 270**	**1, 193, 717**

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

【中学校の生徒数の推移】



（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

② 状況別卒業者数

・2013年3月の卒業者数は1,185,068人（男子：605,377人、女子：579,691人）で、前年度より10,316人減少している。

・卒業者を状況別にみると、「高等学校等進学者」が1,165,742人（進学率98.4％、男子：98.1％、女子：98.7％）、「専修学校（高等課程）進学者」が3,032人（進学率0.3％）、「専修学校（一般課程）等入学者」が1,053人、「公共職業能力開発施設等入学者」が573人、「就職者総数」が4,460人（就職率0.4％）、「左記以外の者」が10,397人、「不詳・死亡の者」が116人である。

・就職者総数を産業別にみると、最も多いのが第2次産業の2,160人（就職者総数の48.4％）で、次いで第3次産業の1,806人（同40.5％）である。

・就職者総数のうち、県外（出身中学校が所在する県以外の県）へ就職した人は454人で、就職者総数の10.2％である。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年８月を基に作成）

【状況別卒業者数】

区　分	卒業者数	A 高等学校等進学者	うち通信制課程を除く	B 専修学校（高等課程）進学者	C 専修学校（一般課程）等入学者	D 公共職業能力開発施設等入学者	E 就職者（左記A～Dを除く）	F 左記以外の者	G 不詳・死亡の者	左記「A」「B」「C」「D」のうち就職している者（再掲）
平成 15 年３月	1,325,208	1,289,008	1,274,039	4,092	2,110	1,380	9,310	19,144	164	1,051
20	1,199,309	1,173,322	1,156,076	2,722	1,309	866	7,331	13,633	126	580
21	1,188,032	1,163,336	1,144,539	2,777	1,216	751	5,777	14,078	97	409
22	1,227,736	1,203,618	1,182,222	2,902	1,345	694	4,979	14,058	140	403
23	1,176,923	1,156,158	1,134,964	2,760	1,104	618	4,106	11,994	183	343
24	1,195,204	1,174,596	1,152,915	3,070	1,297	563	4,409	11,133	136	368
25	1,185,068	1,165,742	1,144,039	3,032	1,053	573	4,155	10,397	116	305

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

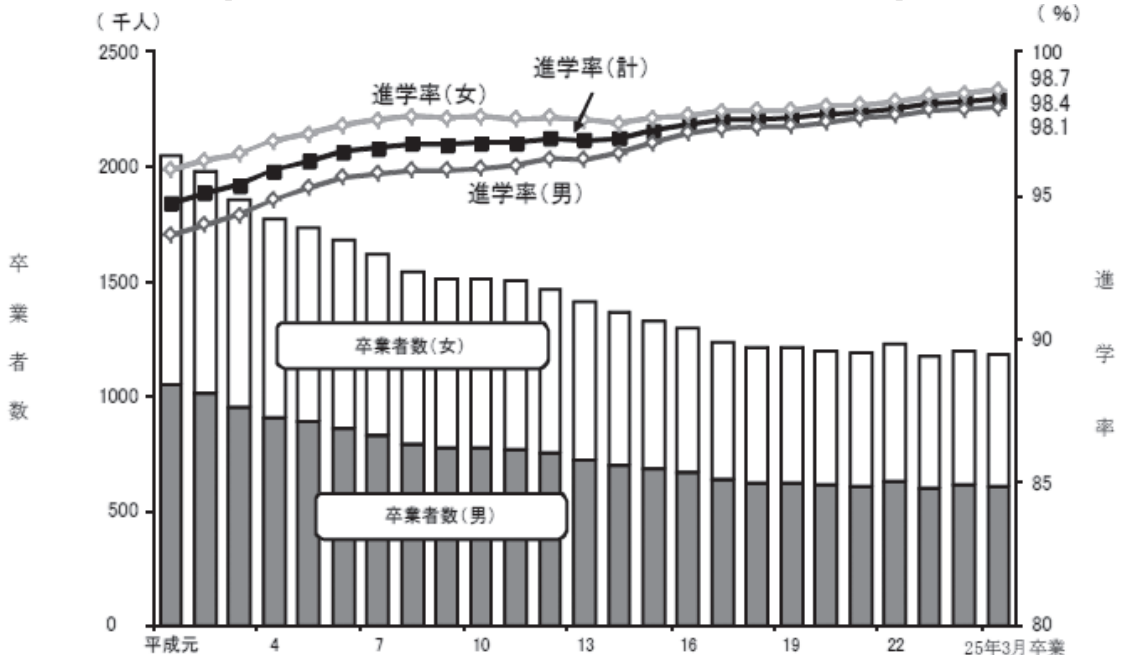
③　卒業者数、進学率の推移

・中学校の卒業者数は、1989（平成元）年3月度の 205万人から 2013（平成25）年3月度の 119万人まで、86万人減少している。

・高校への進学率は、1989年3月度の 94.7％から 2013年3月度の 98.4％まで、3.7 ポイント上昇している。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年 8 月を基に作成）

【中学校の卒業者数、進学率（通信制課程を含む）の推移】



（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

④　都道府県別の高等学校進学率、専修学校進学率、就職率

・高等学校等進学率を都道府県別にみると、最も高いのが岩手県、山形県、新潟県の 99.4%であり、次いで石川県、徳島県の 99.2%等の順となっている。

・専修学校（高等課程）進学率を都道府県別にみると、最も高いのが奈良県の 0.7%であり、次いで福島県の 0.6%等の順となっている。

・就職率を都道府県別にみると、最も高いのが香川県の 1.1%であり、次いで愛知県と山口県の 0.7%、沖縄県の 0.6%等の順となっている。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年８月を基に作成）

【中学校卒業者の都道府県別高等学校等進学率、専修学校（高等課程）進学率及び就職率】

区分	高等学校等進学率(%)	専修学校(高等課程)進学率(%)	就職率(%)	区分	高等学校等進学率(%)	専修学校(高等課程)進学率(%)	就職率(%)	区分	高等学校等進学率(%)	専修学校(高等課程)進学率(%)	就職率(%)
北海道	98.9	0.2	0.2	福　井	98.6	0.2	0.3	山　口	97.7	0.3	0.7
青　森	98.4	0.0	0.3	山　梨	98.5	0.0	0.5	徳　島	99.2	0.1	0.2
岩　手	99.4	0.0	0.2	長　野	98.8	0.2	0.2	香　川	97.6	0.1	1.1
宮　城	99.1	0.1	0.2	岐　阜	98.4	0.2	0.4	愛　媛	98.1	0.1	0.5
秋　田	98.9	0.4	0.1	静　岡	98.0	0.3	0.5	高　知	98.6	0.2	0.3
山　形	99.4	0.1	0.1	愛　知	97.9	0.1	0.7	福　岡	97.5	0.5	0.5
福　島	98.2	0.6	0.3	三　重	98.4	0.1	0.5	佐　賀	97.9	0.4	0.4
茨　城	98.5	0.1	0.4	滋　賀	98.9	0.0	0.3	長　崎	99.1	0.0	0.2
栃　木	98.4	0.0	0.3	京　都	99.0	0.1	0.2	熊　本	98.9	0.2	0.3
群　馬	98.4	0.1	0.3	大　阪	98.1	0.5	0.4	大　分	98.8	0.0	0.3
埼　玉	98.6	0.2	0.3	兵　庫	98.3	0.3	0.4	宮　崎	98.2	0.2	0.5
千　葉	98.5	0.2	0.3	奈　良	98.4	0.7	0.2	鹿児島	98.7	0.0	0.4
東　京	98.3	0.4	0.4	和歌山	98.7	0.3	0.3	沖　縄	96.0	0.3	0.6
神奈川	98.2	0.5	0.3	鳥　取	98.6	0.1	0.3				
新　潟	99.4	0.0	0.2	島　根	98.8	0.1	0.3	全国	98.4	0.3	0.4
富　山	98.9	0.0	0.3	岡　山	98.1	0.1	0.3	男	98.1	0.3	0.6
石　川	99.2	0.0	0.2	広　島	98.0	0.5	0.5	女	98.7	0.2	0.2

（注）高等学校等進学率は，高等学校の通信制課程（本科）への進学者を含む。

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

⑤　高等学校の学科別生徒数

・本科の高校生（全日制・定時制）3,310,938人を学科別にみると、普通科が2,398,368人で最も多く、生徒数のうち72.4％を占めている。次いで、工業科が260,559人で7.9％、商業科が209,416人で6.3％、総合学科が173,680人で5.2％等の順となっている。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年８月を基に作成）

【高等学校（全日制・定時制）の学科別学校数及び生徒数（本科）】

区分	全日制 学校数（校）	全日制 生徒数（人）	全日制生徒 の割合（%）	定時制 学校数（校）	定時制 生徒数（人）	定時制生徒 の割合（%）
計	4,807	3,204,380	669	106,558		
普通	3,654	2,326,015	72.6	468	72,353	67.9
農業	294	82,135	2.6	22	1,786	1.7
工業	527	248,182	7.7	110	12,377	11.6
商業	618	203,342	6.3	81	6,074	5.7
水産	42	9,423	0.3	-	-	-
家庭	264	42,261	1.3	14	583	0.5
看護	93	14,474	0.5	4	358	0.3
情報	28	2,775	0.1	1	238	0.2
福祉	98	9,826	0.3	-	-	-
その他	564	104,531	3.3	3	525	0.5
総合学科	326	161,416	5.0	38	12,264	11.5

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

2　高等学校受験への取組み

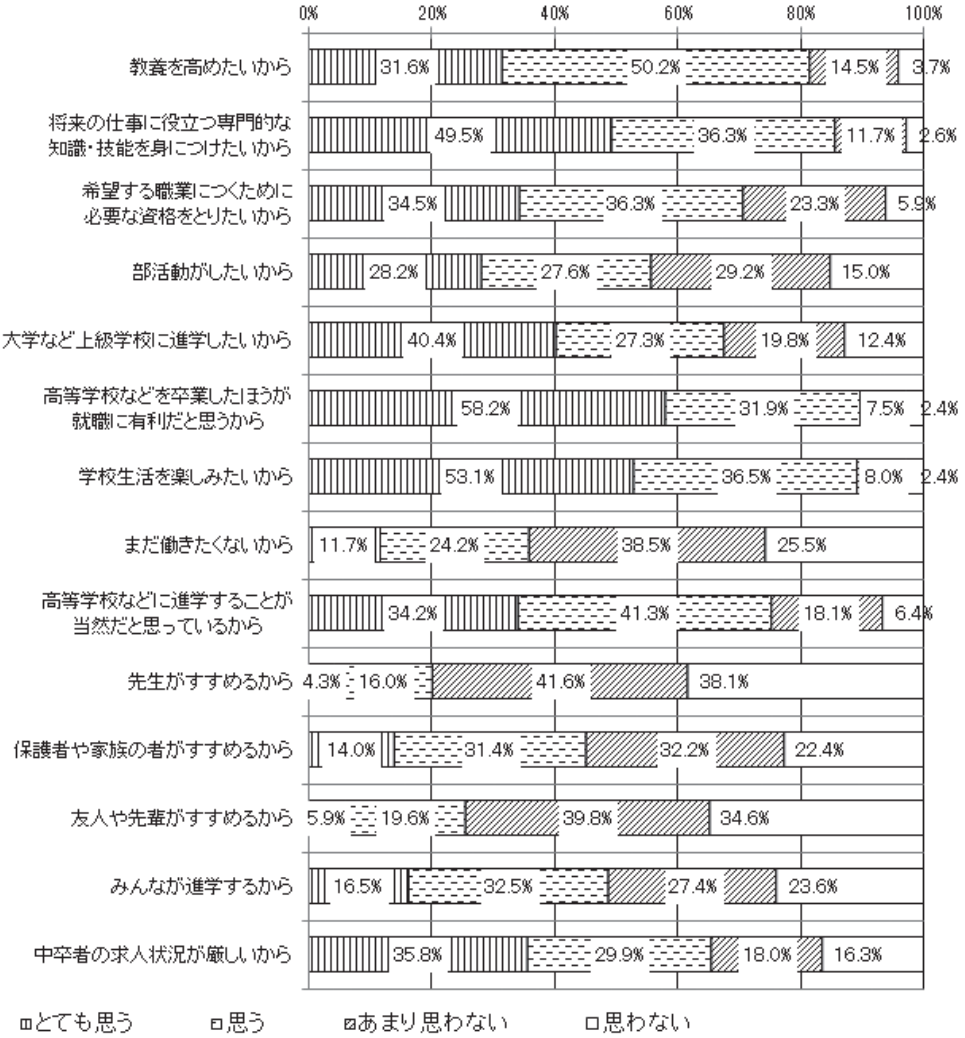
①　進学を希望する理由

・「とても思う」と「思う」を合わせた肯定的な回答の割合では、「高等学校などを卒業した方が就職に有利だと思うから」が 90.1％で最も高い。次いで「学校生活を楽しみたいから」が 89・6％、「将来の仕事に役立つ専門的な知識・技能を身につけたいから」が 85.8％、「教養を高めたいから」が 81.8％等の順である。

・肯定的な回答の割合が低い項目は、「まだ働きたくないから」が 35.9％、「友人や先輩がすすめるから」が 25.5％、「先生がすすめるから」が 20.3％等の順である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【中学生が進学を希望する理由】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

② 志望する高等学校を選択する際に重視したこと

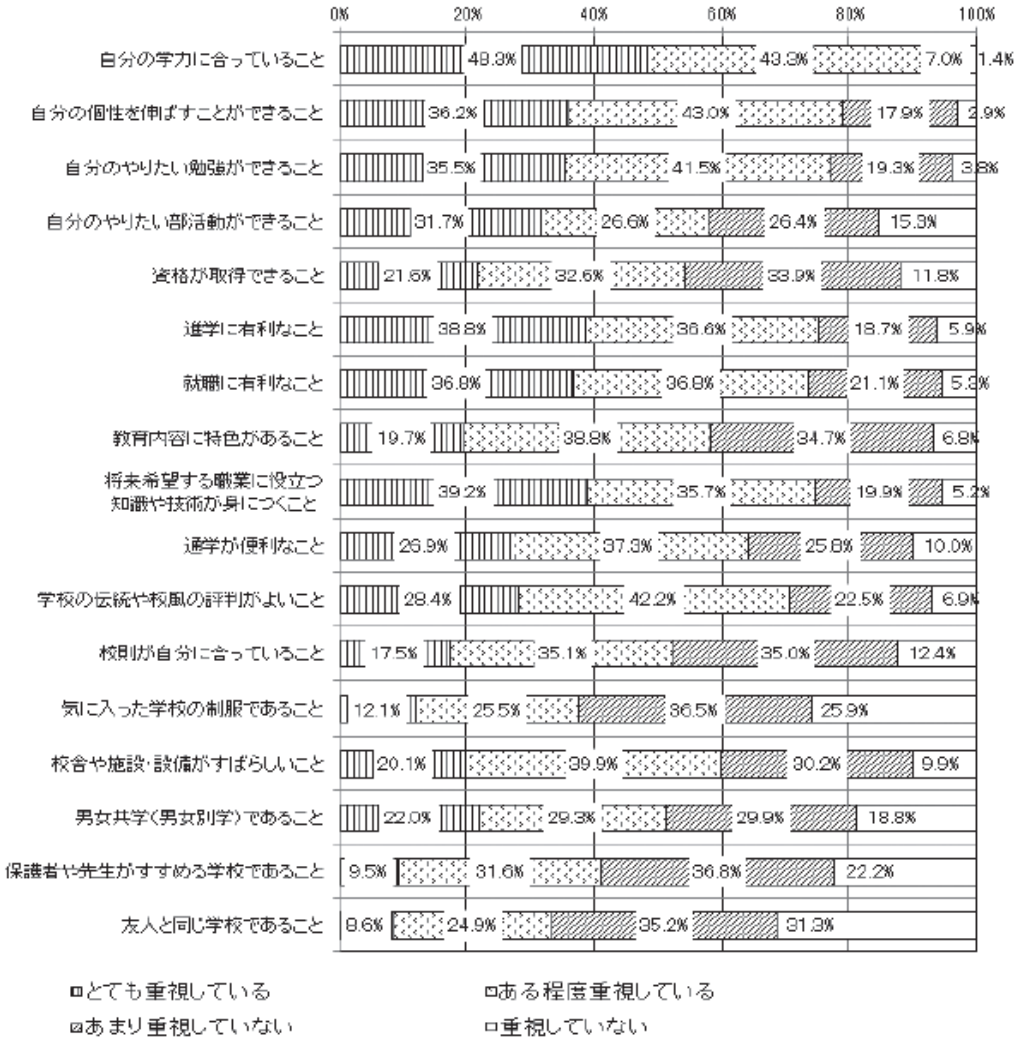
・「とても重視している」と「ある程度重視している」を合わせた肯定的な回答の割合の比較では、「自分の学力に合っていること」が 91.6％と最も高い、次いで「自分の個性を伸ばすことができること」が 79.2％、「自分のやりたい勉強ができること」が 77.0％、「進学に有利なこと」が 75.4％、「将来希望する職業に役立つ知識や技術が身につくこと」が 74.9％、「就職に有利なこと」が 73.6％等の順である。

・「とても重視している」の割合が 30％を超えているのは、上記の項目以外に「自分のやりたい部活動ができること」だけである。

・肯定的な回答の割合が低い項目は、「保護者や先生がすすめる学校であること」が 41.1％、「気に入った学校の制服であること」が 37.6％、「友人と同じ学校であること」が 33.5％等の順である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【進学希望先を選ぶに当たり重視したこと】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

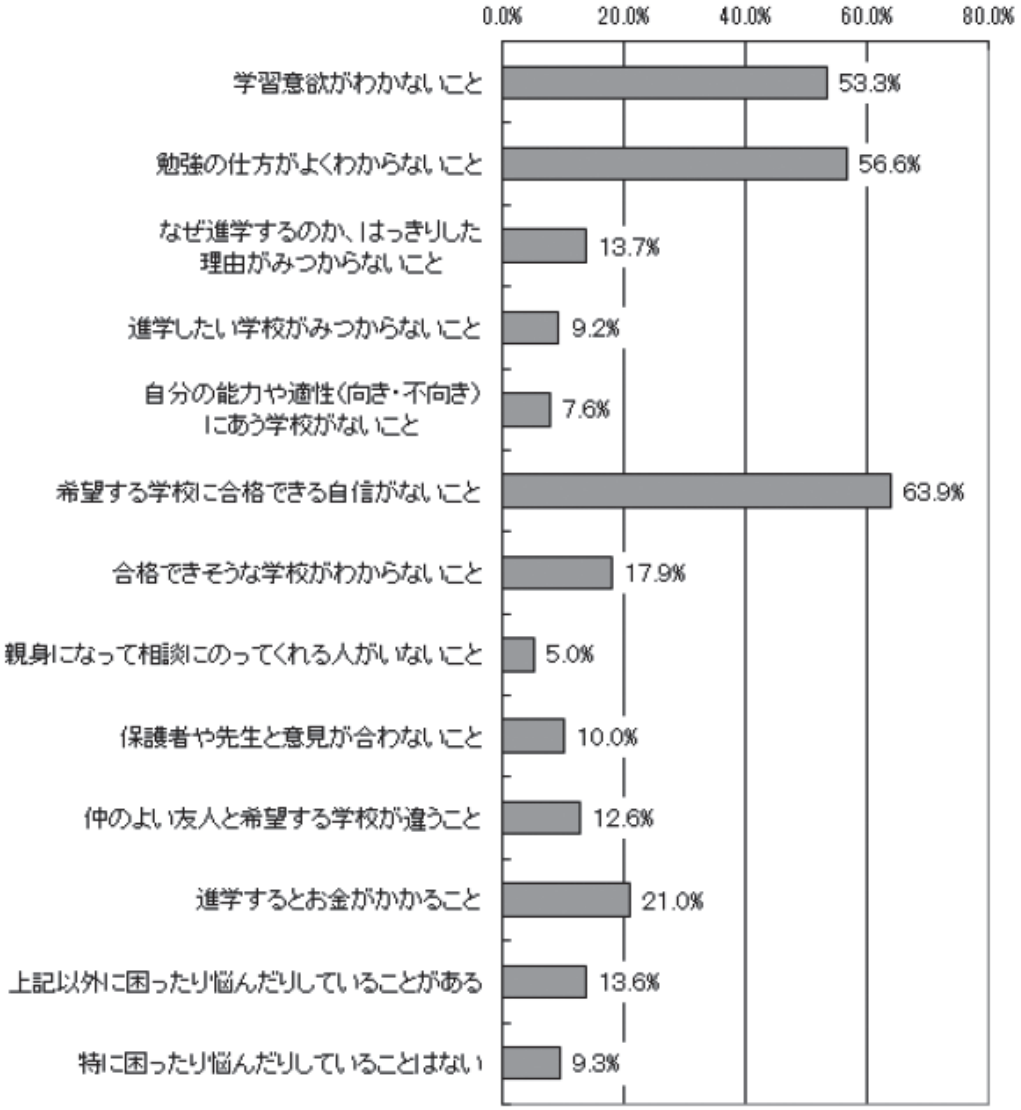
③　進学を希望するにあたって困ったり悩んだりしていること

・「希望する学校に合格できる自信がないこと」の割合が 63.9％で最も高い。次いで「勉強の仕方がよくわからないこと」が 56.6％、「学習意欲がわかないこと」が 53.3％等の順である。

・割合が低いのは、「進学したい学校がみつからないこと」が 9.2％、「自分の能力や適性（向き・不向き）にあう学校がないこと」が 7.6％、「親身になって相談にのってくれる人がいないこと」が 5.0％等である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【進学を希望するにあたって困ったり悩んだりしていること】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

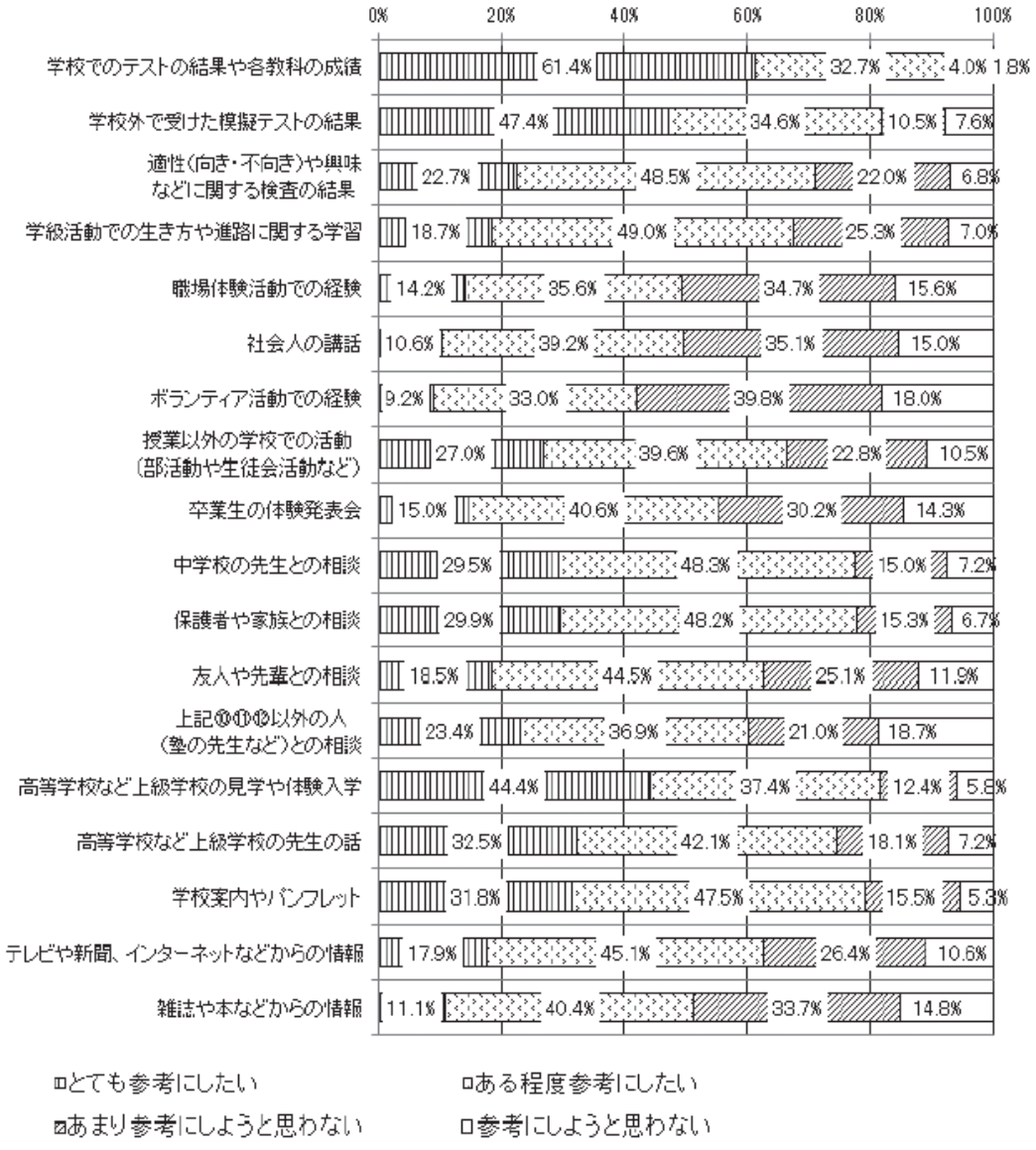
④　希望進学先を選ぶにあたり参考にしたいこと

・「とても参考にしたい」と「ある程度参考にしたい」を合わせた肯定的な回答の割合を比較すると、「学校でのテストの結果や各教科の成績」が 94.1％と最も高い。次いで「学校外で受けた模擬テストの結果」が 82.0％、「高等学校など上級学校の見学や体験入学」が 81.8％、「学校案内やパンフレット」が 79.3％、「保護者や家族との相談」が 78.1％、「中学校の先生との相談」が 77.8％等の順である。

・肯定的な回答の割合が低いのは、「職場体験活動での経験」と「社会人の講話」がともに 49.8％、「ボランティア活動での経験」が 42.2％等の順である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【希望進学先を選ぶにあたり参考にしたいこと】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年3月）

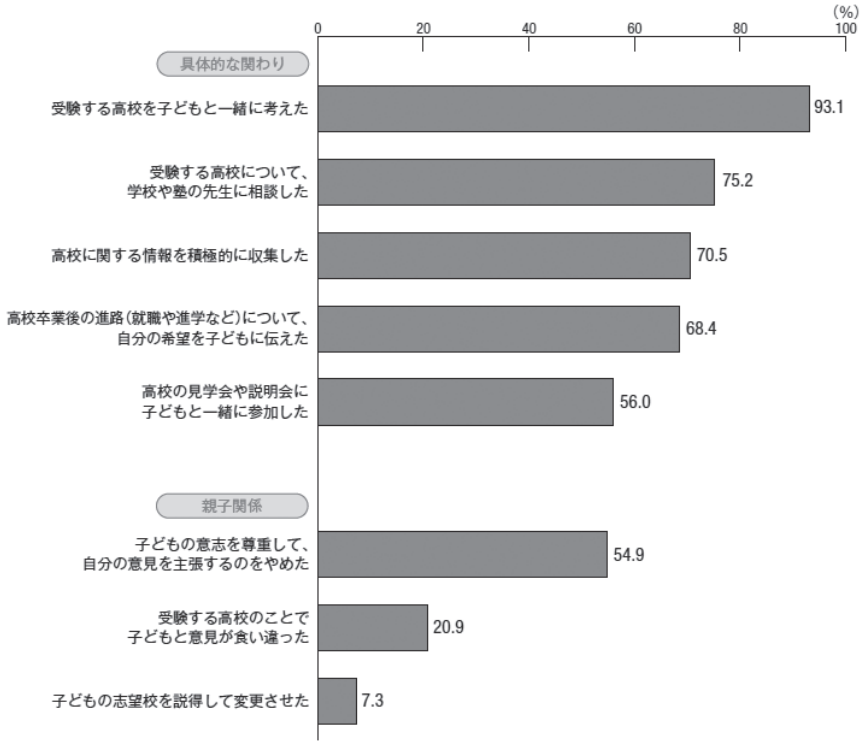
⑤　志望校選択についての母親の関わり、親子関係

・志望校選択に関し、母親の 75.2％が「学校や塾の先生に相談」したり、56.0％が「高校の見学会や説明会」に参加している。多くの生徒が情報源として保護者の話を参考にしていることがうかがえる。

・母親の 93.1％は「受験する高校を子どもと一緒に考えた」が、志望校決定の場面では、「子どもの意志を尊重して、自分の意見を主張するのをやめた」母親が 54.9％となっていることから、子ども主体で決定している家庭が多いことがわかる。

（参考：ベネッセ教育総合研究所「高校データブック 2013」2013年３月を基に作成）

【志望校選びについての母親の関わり、親子関係（高校１年生の母親）】



（資料出所：ベネッセ教育総合研究所「高校データブック 2013」2013年3月）

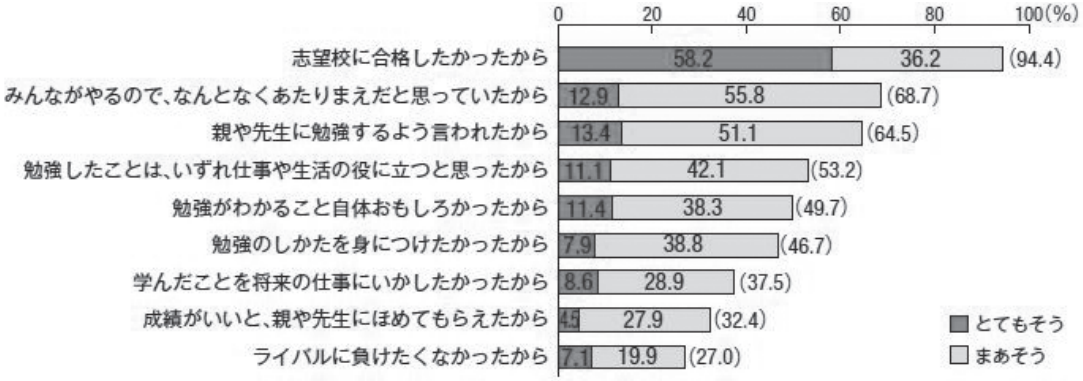
⑥　勉強の理由と方法

・「とてもそう」と「まあそう」を合わせると、勉強の理由では「志望校に合格したかったから」が 94.4% と最も高い。次いで「みんながやるので」が 68.7%、「親や先生に言われたから」が 64.5%、「いずれ仕事や生活の役に立つと思ったから」が 53.2%等の順である。

・「将来の仕事にいかしたかったから」を理由にあげたのは 37.5%、勉強がわかること自体がおもしろかったから」が 49.7% である。

（参考：ベネッセ教育総合研究所「高校データブック 2013」2013年３月を基に作成）

【勉強した理由（高校１年生）】



（資料出所：ベネッセ教育総合研究所「高校データブック 2013」2013年3月）

主体的に生き方を選択する力を育てる

高校教師だった時代の教え子は現在四十歳後半です。同窓会で話題になるのは、人生のさまざまな場面の選択についてです。進学、就職、結婚、転居、転職、などに遭遇したときになかなか選択できなかった経験についてです。では、直面する節目で主体的に進路（生き方）を選択する力を育成するにはどうしたらよいのでしょうか。

アメリカの大学教授にはテェニュア（終身雇用）という制度があります。羨ましいと思うかもしれませんが、そうとばかりは言えません。なぜならば、大学教授として責任もって職務を遂行していくことができるかを自分で判断し、職業生活に終止符をうたなくてはならないからです。自分で定年を決める、ここに究極の選択能力が求められるわけです。

キャリア教育では、主体的に進路（生き方）を選択する力を育成する手段としてまず自己理解を位置付けます。自分の姿を鏡に映して知るように、自己理解では、生き方ついてのさまざまな情報を鏡と考えます。進学先や就（転）職先の情報を知ることで自分を見つめるのです。その際、体験入学や職場見学など、体験がさらに自己理解を深めると考えられています。米国の教育哲学者であるジョン・デューイは、「為すことによって学ぶ」（Learning by doing）とまで言っていっています。

同窓会で卒業生の生きざまに触れることは私にとっては重要な体験のひとつです。かつての教え子から自己理解の機会を与えられていることになります。人生におけるさまざまな節目に直面し、互いに迫られている難しい選択にもがきながら学び合う、まさに師弟同行（師と弟子が同じ行いの中で学びを深めること）を地でいっているのかもしれません。

早稲田大学教育・総合科学学術院　教授（大学院教職研究科長）　三村　隆男

3　高校生の進路

①　進路先（現役生）

・高等学校卒業者の「大学・短大進学率」は、2010年の 54.3％をピークにここ 3年は微減し、2013年3月卒では 53.2％である。

・「就職率」は 3年連続で上昇し、2013年は 16.9％、「専門学校進学率」はここ 4年間連続で上昇し、2013年は 17.0％である。

・「一時的な仕事に就いた者」と「進学も就職もしていない者」の合計は、2013年は 67,563人であり、卒業者全体のうち 6.2％を占める。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年 8 月を基に作成）

【高等学校職業者の状況】

（人(%)）

区　分	卒業者	大学・短大進学者(率)	うち大学(学部)進学者(率)	専門学校進学者(率)	就職者(率)	一時的な仕事に就いた者(率)	進学も就職もしていない者(率)	不詳・死亡
平成16年3月	1,235,482	560,055 (45.3)	459,456 (37.2)	237,279 (19.2)	208,907 (16.9)	27,003 (2.2)	92,666 (7.5)	216
17年3月	1,203,251	568,710 (47.3)	473,263 (39.3)	228,867 (19.0)	208,747 (17.3)	22,855 (1.9)	78,922 (6.6)	267
18年3月	1,172,087	578,525 (49.4)	490,242 (41.8)	213,122 (18.2)	210,442 (18.0)	19,232 (1.6)	66,434 (5.7)	140
19年3月	1,148,108	587,999 (51.2)	505,951 (44.1)	193,156 (16.8)	212,635 (18.5)	16,358 (1.4)	59,962 (5.2)	410
20年3月	1,089,188	575,659 (52.9)	500,631 (46.0)	167,092 (15.3)	206,628 (19.0)	12,862 (1.2)	53,757 (4.9)	230
21年3月	1,065,412	574,333 (53.9)	503,840 (47.3)	156,363 (14.7)	193,615 (18.2)	13,592 (1.3)	54,678 (5.1)	158
22年3月	1,071,422	582,272 (54.3)	513,013 (47.9)	170,352 (15.9)	168,727 (15.7)	15,560 (1.5)	59,703 (5.6)	299
23年3月	1,064,074	573,679 (53.9)	507,509 (47.7)	172,200 (16.2)	173,566 (16.3)	14,994 (1.4)	56,965 (5.4)	369
24年3月	1,056,387	565,779 (53.6)	503,545 (47.7)	177,486 (16.8)	176,931 (16.7)	13,892 (1.3)	51,922 (4.9)	283
25年3月	1,091,617	581,138 (53.2)	517,398 (47.4)	185,546 (17.0)	184,702 (16.9)	13,624 (1.2)	53,939 (4.9)	302

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

②　高等学校学科別進路先

・普通科卒業者は、大学等進学と専修学校専門課程の占める割合が高い。

・専門高等学校卒業者のうち、工業科卒業者は、就職者の比率が高く、左記以外の者の比率が低い。商業科では卒業者の約4人に 1人、総合学科では卒業者の約3人に 1人が大学等に進学している。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年 8 月を基に作成）

【学科別状況別卒業者数】

（人（%））

区分	計	大学等進学	専修学校専門課程	公共職業能力開発施設	就職	一時的な仕事	左記以外
普通科	794,222	494,163 (62.2)	122,361 (15.4)	3,486 (0.4)	64,041 (8.1)	9,284 (1.2)	42,441 (5.3)
工業科	82,404	12,302 (14.9)	12,270 (14.9)	1,684 (2.0)	52,119 (63.2)	906 (1.1)	2,088 (2.5)
商業科	70,149	17,997 (25.7)	18,554 (26.4)	339 (0.5)	28,367 (40.4)	1,284 (1.8)	2,372 (3.4)
総合学科	55,450	19,561 (35.3)	15,878 (28.6)	632 (1.1)	14,098 (25.4)	1,151 (2.1)	2,850 (5.1)

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）2013年8月」を基礎に事務局が編集）

③　都道府県別の進路先

・2013年3月卒業者の全国平均の大学等進学率は 53.2%（大学（学部）進学率は 47.3%）、専修学校（専門課程）進学率は 17.0%、就職率は 17.0%である。

・大都市圏（関東の一都三県、近畿の二府一県）では、全国平均よりも大学等進学率が高く、就職率が低くなっているのに対し、東北・山陰・九州（福岡県を除く）では、全国平均よりも専修学校進学率と就職率が高く、大学等進学率が低いという傾向がある。

・就職者総数のうち、県外（出身高校が所在する県以外の県）へ就職した者は 33,311人で、就職者総数の 18.0%を占めている（ちなみに、2013年3月卒で大学等に進学した者のうち、他県（出身高校が所在する県以外の県）の大学に入学した者の比率は 57.7%で、性別では男子が 59.6%、女子が 55.2%である）。

（参考：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年８月を基に作成）

【高等学校卒業者の都道府県別進学率と就職率】

区分	大学等進学率(%)	大学（学部）進学率(%)	専修学校（専門課程）進学率(%)	就職率(%)	区分	大学等進学率(%)	大学（学部）進学率(%)	専修学校（専門課程）進学率(%)	就職率(%)
北海道	39.9	34.2	22.7	22.0	京都	64.8	58.5	14.4	8.4
青森	41.4	34.0	15.4	31.9	大阪	57.7	50.9	15.0	11.2
岩手	40.4	33.8	21.3	29.9	兵庫	59.6	54.1	14.2	13.2
宮城	48.0	43.9	17.8	23.3	奈良	57.8	51.0	14.0	10.9
秋田	43.0	35.6	18.4	29.5	和歌山	47.6	41.1	17.5	20.6
山形	44.4	37.9	19.2	28.2	鳥取	42.3	32.8	17.6	23.8
福島	43.3	37.2	20.3	28.5	島根	46.0	37.2	23.2	22.0
茨城	49.3	45.7	18.4	20.0	岡山	51.0	44.5	16.6	21.2
栃木	52.3	47.2	17.6	19.8	広島	60.4	55.0	13.7	13.8
群馬	51.2	45.6	20.2	17.9	山口	41.4	35.2	17.7	27.8
埼玉	56.5	51.3	17.7	13.2	徳島	50.5	45.1	16.8	21.7
千葉	53.8	49.3	18.5	12.5	香川	49.3	42.2	18.1	18.8
東京	65.2	62.0	13.0	5.9	愛媛	50.4	43.4	18.5	21.6
神奈川	60.2	55.5	16.1	7.7	高知	44.4	36.5	21.9	17.8
新潟	45.0	39.4	28.4	17.3	福岡	52.0	44.6	15.8	17.2
富山	52.4	43.5	18.0	20.6	佐賀	41.8	35.2	17.8	31.0
石川	53.9	46.5	14.7	20.9	長崎	41.9	36.4	17.9	29.6
福井	52.8	44.1	15.3	23.5	熊本	43.6	37.5	19.1	25.3
山梨	57.4	51.3	16.9	15.1	大分	45.5	35.4	21.0	26.2
長野	47.8	38.0	22.9	16.4	宮崎	42.4	34.3	17.5	29.7
岐阜	55.2	47.4	14.3	22.6	鹿児島	41.4	29.3	20.8	26.5
静岡	53.1	47.9	16.5	21.3	沖縄	38.2	34.4	26.4	15.2
愛知	58.3	52.8	12.9	17.7	全国	53.2	47.3	17.0	17.0
三重	50.9	44.6	14.6	25.2	男	50.9	49.7	13.6	20.3
滋賀	56.2	49.3	16.4	16.6	女	55.5	44.9	20.5	13.6

（注）大学等進学率は，大学・短期大学の通信教育部への進学者を含む。

（資料出所：文部科学省「平成25年度学校基本調査（速報値）」2013年8月）

Part 1

中学校の部

第2章

中学校における
キャリア教育の理解

◆第１節　キャリア教育の理解

１　キャリア教育の系譜

① 中教審「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」（答申）（1999年12月）

・キャリア教育とは、「学校教育と職業生活の円滑な接続を図るため、望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに，自己の個性を理解し，主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」をいう。

・キャリア教育は、学校ごとに目標を設定し、教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある。

② 文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」（報告書）（2004年１月）

・キャリア教育とは、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し，それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」、端的には「児童生徒一人一人の勤労観，職業観を育てる教育」をいう。

・キャリア教育は、従来の教育の在り方を幅広く見直し、改革することを求めるものである。

③ キャリア教育等推進会議「キャリア教育推進プラン」（2007年５月）

・キャリア教育とは、「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに，自己の個性を理解し，主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」をいう。

④ 中教審「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）（2011年１月）

・キャリア教育とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」をいう

・キャリア教育においては、幼児期の教育から高等教育まで、発達の段階に応じて体系的に実施されるべきであり、様々な活動を通じて、基礎的・汎用的能力を中心に育成する。

２「キャリア教育」に関する施策の展開

① 教育基本法の改正（2006年）

第２条　教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

二　個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。

② 学校教育法の改正（2007年）

第21条　義務教育として行われる普通教育は、‥‥目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

２　学校内外における社会的活動を促進し、自主、自律及び協同の精神、規範意識、公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと。

４　家族と家庭の役割、生活に必要な衣、食、住、情報、産業その他の事項について基礎的な理解と技能を養うこと。

10　職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと。

第51条　高等学校における教育は、‥‥目的を実現するため、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

1　義務教育として行われる普通教育の成果を更に発展拡充させて、豊かな人間性、創造性及び健やかな身体を養い、国家及び社会の形成者として必要な資質を養うこと。

2　社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な知識、技術及び技能を習得させること。

3　個性の確立に努めるとともに、社会について、広く深い理解と健全な批判力を養い、社会の発展に寄与する態度を養うこと。

③　高等学校学習指導要領の改訂（2009年３月）

・高等学校指導要領総則第５款教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項

・教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項

生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること。

・職業教育に関して配慮すべき事項

学校においては、キャリア教育を推進するために、地域や学校の実態、生徒の特性、進路等を考慮し、地域や産業界等との連携を図り、産業現場等における長期間の実習を取り入れるなどの就業体験の機会を積極的に設けるとともに、地域や産業界等の人々の協力を積極的に得るよう配慮するものとする。

④　「４領域８能力」と「基礎的・汎用的能力」の関係

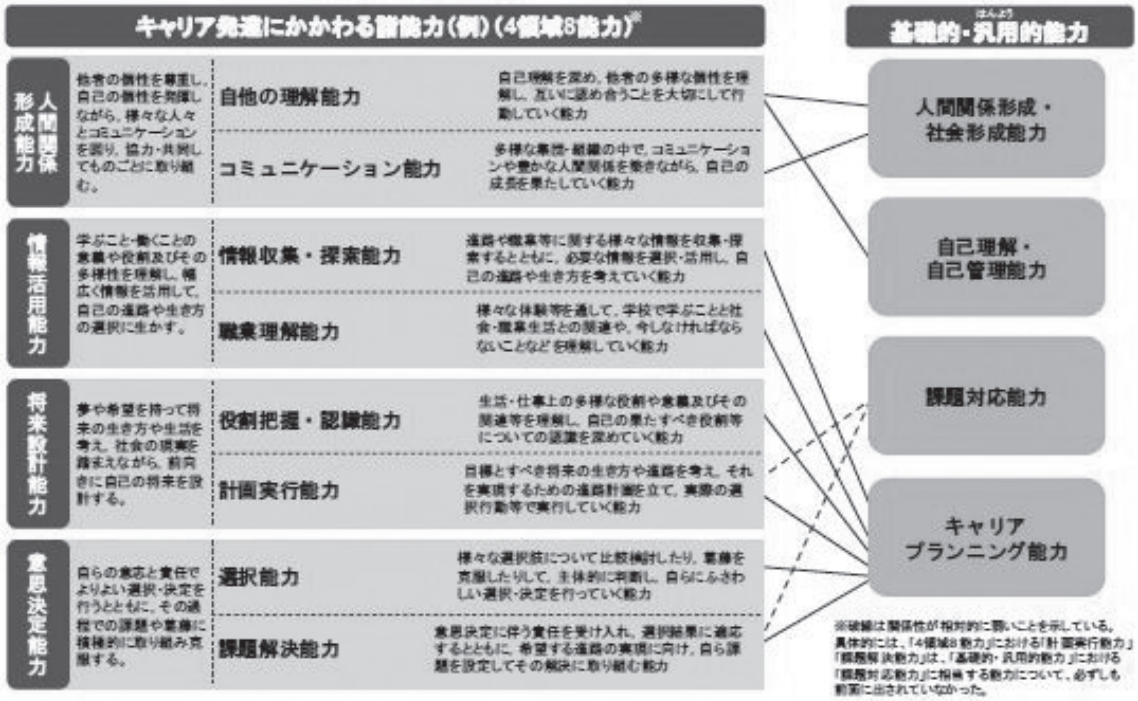
・キャリア教育を通して育成すべき能力として、2002年11月に国立教育政策研究所生徒指導研究センターから「４領域８能力」が示された。

・この「４領域８能力」論は、これまでの進路指導の実践を飛躍的に向上させる論理を示したものとして高い評価を受けているが、一方では画一的な運用、本来目指された能力との齟齬、生涯にわたって育成される一貫した能力論の欠如などの課題も内包していた。

・2011年１月、中教審は、これまでのキャリア教育で残されてきた課題を踏まえ、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）を取りまとめ、今後のキャリア教育がその中心として育成すべき能力として「基礎的・汎用的能力」を示した。

（参考：文部科学省国立教育政策研究所生徒指導研究センター「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書」2011年3月を基に作成）

【キャリア発達にかかわる諸能力（４領域８能力）と基礎的・汎用的能力の対応関係】



（資料出所：中教審「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）2011年１月）

⑤　キャリア教育を通して育成すべき「基礎的・汎用的能力」

・分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力である。
・社会人・職業人に必要とされる基礎的な能力と現在学校教育で育成している能力との接点を確認し、これらの能力育成を、キャリア教育の視点に取り込んでいくことは、学校と社会・職業との接続を考える上で意義がある。
・基礎となる能力は基礎的・汎用的能力として以下の４つの能力に整理される。

ⅰ　人間関係形成・社会形成能力

・多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。
・具体的な要素としては、他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等が挙げられる。

ⅱ　自己理解・自己管理能力

・自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。
・具体的な要素としては、自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動等が挙げられる。

ⅲ　課題対応能力

・仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力である。
・具体的な要素としては、情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発

見、計画立案、実行力、評価・改善等が挙げられる。

iv　キャリアプランニング能力

・「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力である。

・具体的な要素としては、学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等が挙げられる。

・これらの能力は、包括的な能力概念であり、必要な要素をできる限り分かりやすく提示するという観点でまとめたものである。この４つの能力は、それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。このため、特に順序があるものではなく、また、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものでもない。

・これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるかは、学校や地域の特色、専攻分野の特性や子ども・若者の発達の段階によって異なると考えられる。各学校においては、この４つの能力を参考にしつつ、それぞれの課題を踏まえて具体の能力を設定し、工夫された教育を通じて達成されることが望まれる。その際、初等中等教育の学校では、新しい学習指導要領を踏まえて育成されるべきである。

（参考：中教審「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
（答申）2011年１月を基に作成）

⑥　第２期教育振興基本計画（2013年６月14日閣議決定）

・社会的・職業的自立に向けた能力・態度の育成等：社会的・職業的自立の基盤となる基礎的・汎用的能力を育成するとともに、労働市場の流動化や知識・技能の高度化に対応し、実践的で専門性の高い知識・技能を、生涯を通じて身に付けられるようにする。このため、キャリア教育の充実や、インターンシップの実施状況の改善、就職ミスマッチの改善に向けた教育・雇用の連携方策の強化を図る。

・「社会を生き抜く力」の一態様として、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を身に付けさせるとともに、職業を通じて社会の一員として役割を果たすことの意義についての理解をはじめとした、勤労観・職業観等の価値観を自ら形成・確立できる子ども・若者の育成を目指す。

・幼児期の教育から高等教育まで各学校段階を通じた体系的・系統的なキャリア教育を充実し、特に、高等学校普通科におけるキャリア教育を推進する。その際、子ども・若者の発達の段階に応じて学校の教育活動全体を通じた指導を進めるとともに、地域におけるキャリア教育支援のための協議会の設置促進等を通じ、職場体験活動・インターンシップ等の体験活動や外部人材の活用など地域・社会や産業界と連携・協働した取組を推進する。

３　中学校におけるキャリア教育の意義と課題

①　キャリア教育の意義

・中学校においては、社会における自らの役割や将来の生き方・働き方等についてしっかり考えさせるとともに、目標を立てて計画的に取り組む態度を、体験を通じてその重要性について理解を深めさせつつ育成し、進路の選択・決定へと導くことが重要である。

・各学校においては、キャリア教育の視点で、各教科・道徳・総合的な学習の時間・特別活動や

日常生活におけるそれぞれの活動を体系的に位置付けることにより、能力や態度の効果的な育成を図ることが必要である。

・職場体験活動は、ある職業や仕事を暫定的な窓口としながら実社会の現実に迫ることが中心的な課題となる。その際、活動の効果をより引き出すための指導の改善・充実や、円滑に実施するための条件整備を図ることが必要である。

・活動の目標やこれを達成するための道筋・手だてを明確なものとし、適切に評価されることを考慮した指導が重要である。例えば、事前指導として、職場体験学習の意義や体験先の仕事内容に関する学習、体験先訪問、また、事後指導として、生徒が成就感・達成感を感じられるよう、自己評価カード作成や体験感想文作成、体験発表会等がある。

・中学校においては、「学ぶことや働くことの意義」等についての学習や体験的な学習が広く行われるようになっており、生徒がより主体的かつ真剣に自らの進路を考え、目的意識を持って進路選択を行うようになってきている。しかし、進路指導についての中学校の教員と生徒や保護者の認識の差も大きくあり、教員は、生徒や保護者が個性や適性を考える学習を望んでいるという認識を持って、組織的・計画的に進路について指導・援助することが必要である。

（参考：中教審「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）2011年１月を基に作成）

② キャリア教育の背景と課題

・子どもたちが育つ社会環境の変化に加え、産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等は、子どもたち自らの将来の捉え方にも大きな変化をもたらしている。子どもたちは、自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見つけにくく、自らの将来に向けて希望あふれる夢を描くことも容易ではなくなっている。

・環境の変化は、子どもたちの心身の発達にも影響を与え始めている。例えば、身体的には早熟傾向にあるが、精神的・社会的側面の発達はそれに伴っておらず遅れがちであるなど、全人的発達がバランス良く促進されなくなっている。具体的には、人間関係をうまく構築できない、自分で意思決定できない、自己肯定感をもてない、将来に希望を持つことができないといった子どもの増加などが指摘されている。

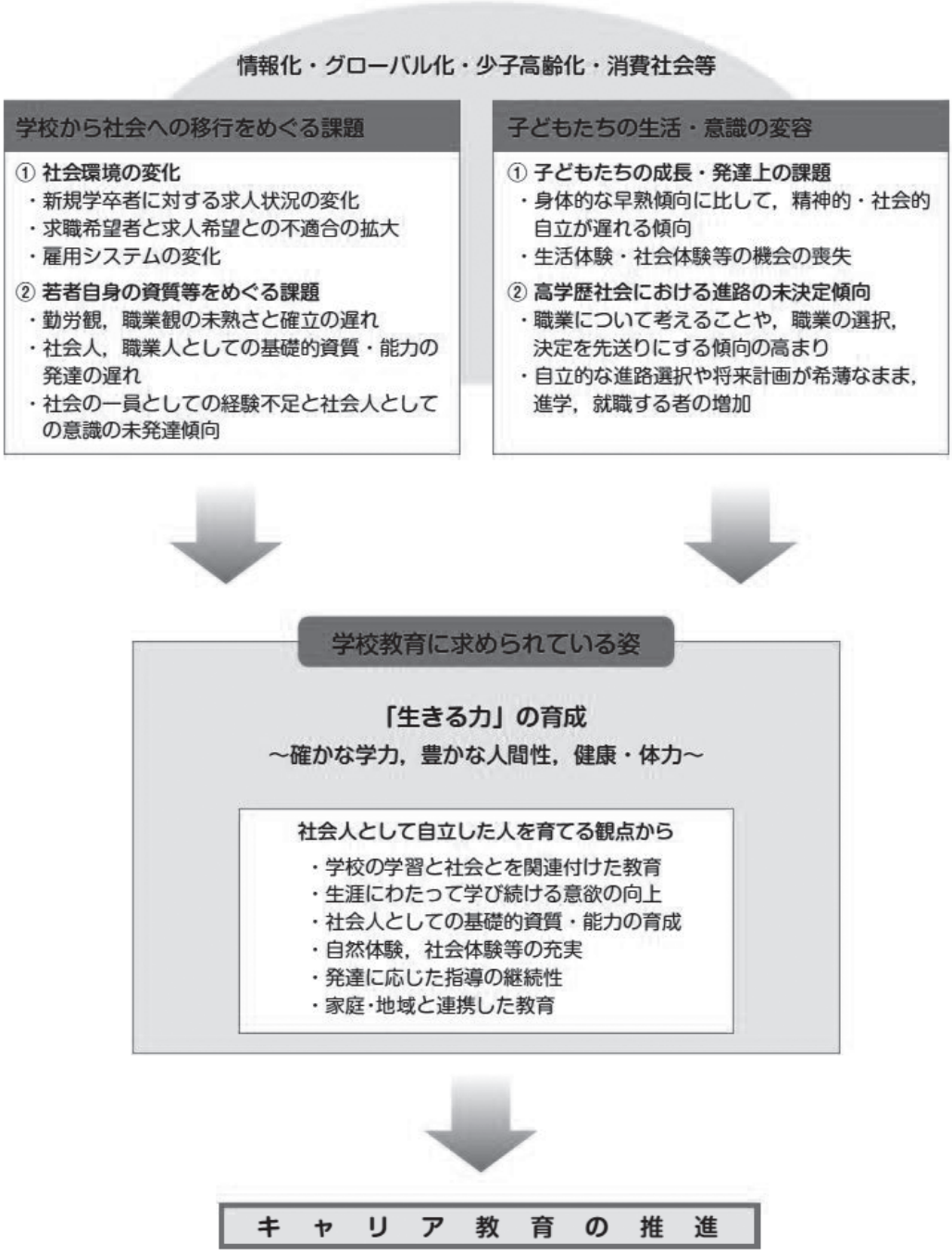
・子どもたちが希望をもって、自立的に自分の将来を切り拓いて生きていくためには、変化を恐れず、変化に対応していく力と態度を育てることが不可欠である。そのためには、日常の教育活動を通して、学ぶ面白さや学びへの挑戦の意味を子どもたちに体得させることが大切である。

・子どもたちが、未知の知識や体験に関心をもち、仲間と協力して学ぶことの楽しさを通して、未経験の体験に挑戦する勇気とその価値を体得することで、生涯にわたって学び続ける意欲を維持する基盤をつくることができる。

・子どもたちが将来自立した社会人となるための基盤を作るためには、学校の努力だけではなく、子どもたちにかかわる家庭・地域が学校と連携して、同じ目標に向かう協力体制を築くことが不可欠である。

（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引」2011年３月を基に作成）

【キャリア教育が必要となった背景と課題】



（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引」2011年３月）

４　キャリア教育を通して育成すべき能力についての考え方

①　中学校段階におけるキャリア発達課題

・中学校段階は、自我の目覚めや独立の欲求が高まるとともに、人間関係も広がり、社会の一員として自分の役割や責任の自覚が芽生えてくる時期である。また、他者とかかわり、様々な葛藤や経験の中で、自らの人生や生き方への関心が高まり、自分の生き方を模索し、夢や理想を持つ時期である。

・一方で、高校入学者選抜を始めとする現実的な進路選択を迫られ、自分の意思と責任で決定し

なければならない時期でもあり、キャリア教育実践にとって極めて重要である。

・このような発達の段階にある中学生が、自分を見つめ直し、自分と社会との関わり合いを考え、将来における多様な生き方や進路選択の可能性を理解し、自らの意思と責任において自己の生き方や進路選択ができるような能力、言い換えれば、まさしく社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力を育むことはたいへんに重要である。

（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引」2011年３月及び文部科学省国立教育政策研究所生徒指導研究センター「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書」2011年３月を基に作成）

【中学校におけるキャリア発達段階と特徴】

中学校段階でのキャリア発達課題		
○キャリア発達段階　⇒現実的探索と暫定的選択の時期 ○キャリア発達課題 ・肯定的自己理解と自己有用感の獲得 ・興味・関心等に基づく勤労観・職業観の形成 ・進路計画の立案と暫定的選択 ・生き方や進路に関する現実的探索		
各学年におけるキャリア発達課題の例		
１年生	２年生	３年生
・自分の良さや個性が分かる。 ・自己と他者の違いに気付き，尊重しようとする。 ・集団の一員としての役割を理解し，それを果たそうとする。 ・将来に対する漠然とした夢やあこがれを抱く。	・自分の言動が他者に及ぼす影響について理解する。 ・社会の一員としての自覚が芽生えるとともに，社会や大人を客観的にとらえる。 ・将来への夢を達成する上での現実の問題に直面し，模索する。	・自己と他者の個性を尊重し，人間関係を円滑に進める。 ・社会の一員としての参加には義務と責任が伴うことを理解する。 ・将来設計を達成するための困難を理解し，それを克服するための努力に向かう。

（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引」2011年３月）

② 各教科等との関連

・キャリア教育は、すべての教育活動を通して実践されるものであるが、生徒一人一人の「生き方」に直接働きかける「道徳」「総合的な学習の時間」「特別活動」は、特に重要な実践の場となる。

・道徳：「主として自分自身に関すること」「主として他の人とのかかわりに関すること」「主として集団や社会との関わりに関すること」等を柱として、「道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的実践力を育成する」ことを目標としている。
→キャリア教育との関連が極めて深い

・特別活動及び学級活動：特別活動は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてより良い生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」ことを目標とする。学級活動は、「適応と成長及び健康安全」と「学業と進路」等を内容とする。
→キャリア教育の中核的な実践の場

・総合的な学習の時間：「横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自己の生き方を考えることができるようにすること」を目標とする。各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすることが重要であり、各教科等で別々に身に付けた知識や技能をつながりのあるものとして組織化し直し、改めて現実の生活にかかわる学習において活用し、それらが連動して機能するようにすることが求められている。

→それぞれの教育活動を通したキャリア教育の実践をつなぐ可能性を有している

（参考：文部科学省国立教育政策研究所生徒指導研究センター
「キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書」2011年３月を基に作成）

③　キャリア教育と職業教育の関係

・育成する力の観点から整理

◆キャリア教育：一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度

◆職業教育：一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度

・教育活動の観点から整理

◆キャリア教育：普通教育、専門教育を問わず様々な教育活動の中で実施される。職業教育も含まれる。

◆職業教育：具体の職業に関する教育を通して行われる。この教育は、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を育成する上でも、極めて有効である。

（出典：中教審「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」
（答申）2011年１月）

④　キャリア教育と進路指導

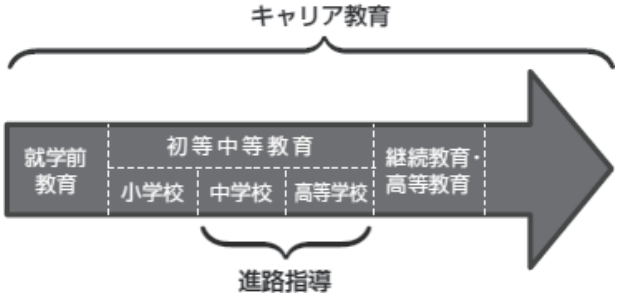
・中学校における進路指導は、教育活動全体を通じ、計画的、組織的に行われるものであり、この点においてキャリア教育との差異はない。また、その定義・概念やねらいも、中学校におけるキャリア教育とほぼ同じと言ってよい。

・キャリア教育は、就学前段階から初等中等教育・高等教育を貫き、また学校から社会への移行に困難を抱える若者（若年無業者など）を支援する様々な機関においても実践されるものである。一方、進路指導は、理念・概念やねらいにおいてキャリア教育と同じものであるが、中学校・高校に限定される教育活動である。

・進路指導は、本来、進路選択を間近に控えた時期になってからの指導・援助や斡旋だけでなく、入学から卒業までにとどまらず、卒業後までも包含した計画的・組織的な教育活動であり、卒業時の進路をどう選択するかを含めて、さらにどういう人間になり、どう生きていくことが望ましいかといった長期的展望に立って指導・援助するという意味で「生き方の指導」とも言える教育活動である。

（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引」2011年３月を基に作成）

【キャリア教育と進路指導との関係】



（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引」2011年３月）

◆第２節　中学校におけるキャリア教育の取組み状況に関する理解

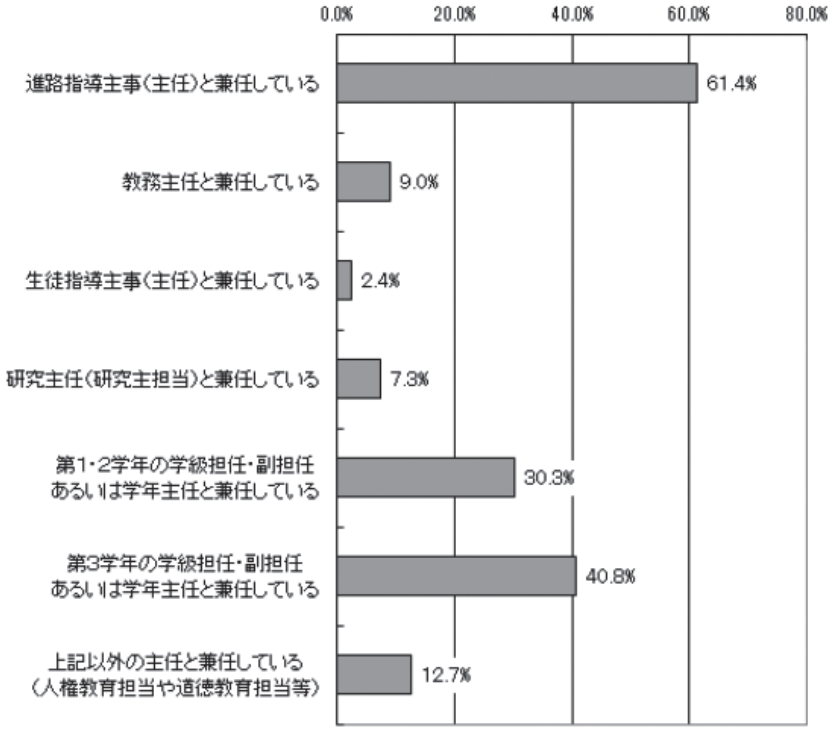
１　キャリア教育の取組み状況

①キャリア教育を中心となって進めている人の兼任状況

・兼任の状況は、「進路指導主事（主任）と兼任している」が 61.4% と最も高い。次いで「第３学年の学級担任・副担任あるいは学年主任と兼任している」が 40.8%、「第１・２学年の学級担任・副担任あるいは学年主任と兼任している」が 30.3%である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【キャリア教育を中心となって進める担当者の兼任の状況】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

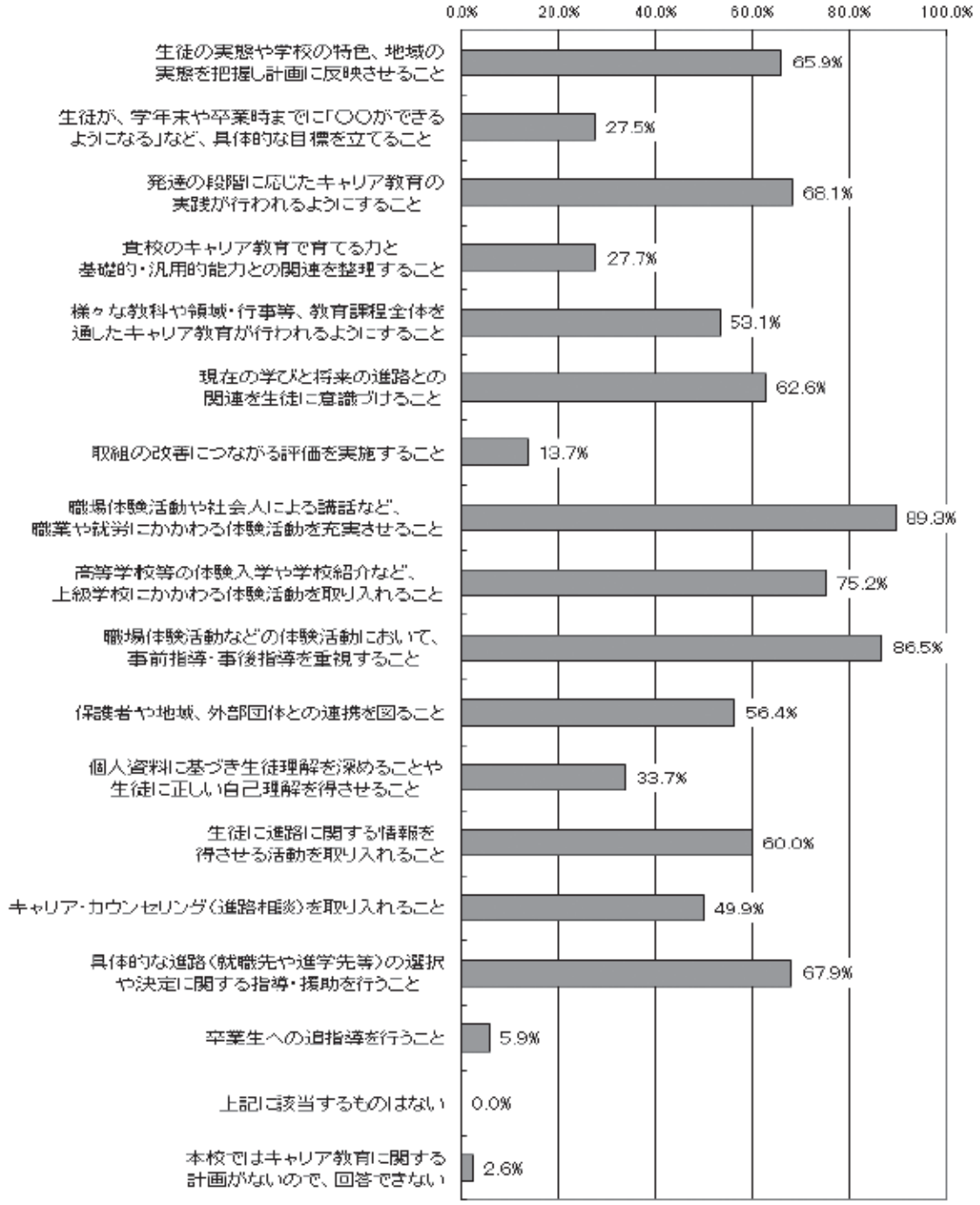
②　キャリア教育の計画を立てる上で重視したこと

・「職場体験活動や社会人による講話など、職業や就労にかかわる体験活動を充実させること」の割合が 89.3%と最も高い。次いで「職場体験活動などの体験活動において、事前指導・事後指導を重視すること」が 86.5%、「高等学校等の体験入学や学校紹介など、上級学校にかかわる体験活動を取り入れること」が 75.2%等の順である。

・割合が低いのは、「貴校のキャリア教育で育てる力と基礎的・汎用的能力との関連を整理すること」が 27.7%、「生徒が、学年末や卒業時までに『○○ができるようになる』など、具体的な目標を立てること」が 27.5%、「取組の改善につながる評価を実施すること」が 13.7%、「卒業生への追指導を行うこと」が５.9% である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【キャリア教育の計画を立てる上で重視したこと】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

③ 「基礎的・汎用的能力」に関する指導状況

・全体的にみると、どの項目も、すべての学年で高い割合で指導されている。「『人間関係形成・社会形成能力』の育成に関する授業・指導」や「『自己理解・自己管理能力』の育成に関する授業・指導」は、「１年」や「２年」での割合は高いが、「３年」では若干低い。一方、「『課題対応能力』の育成に関する授業・指導」や「『キャリアプランニング能力』の育成に関する授業・指導」は「１年」や「２年」よりも「３年」での割合が高い。

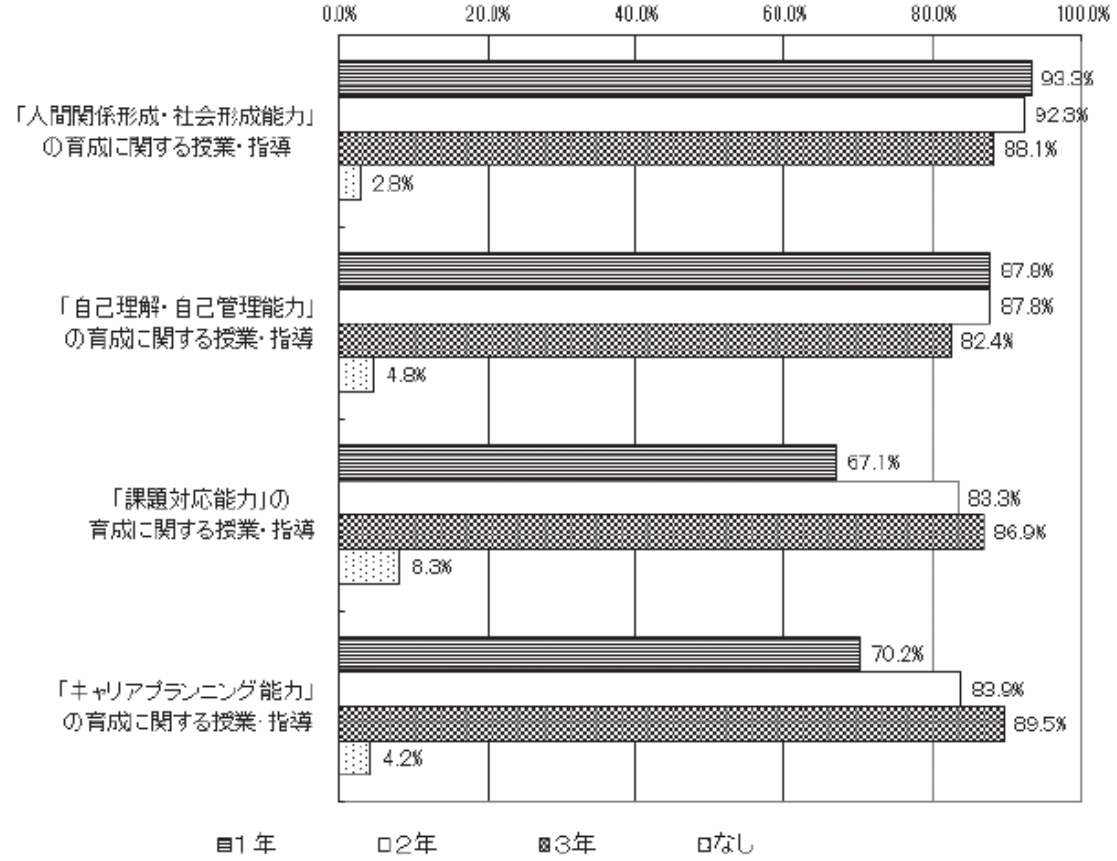
・「１年」では、「『人間関係形成・社会形成能力』の育成に関する授業・指導」が 93.3％と最も高い。次いで、「『自己理解・自己管理能力』の育成に関する授業・指導」が 87.8％である。

・「２年」でも、「『人間関係形成・社会形成能力』の育成に関する授業・指導」が 92.3％と最も高い。次いで、「『自己理解・自己管理能力』の育成に関する授業・指導」が 87.8％である。

・「３年」では、「『キャリアプランニング能力』の育成に関する授業・指導」が 89.5％と最も高い。次いで「『人間関係形成・社会形成能力』の育成に関する授業・指導」が 88.1％、「『課題対応能力』の育成に関する授業・指導」が 86.9％である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」に関する指導状況】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

④　キャリア教育に関する学習の機会や内容等の実施状況

・教育課程の中でのキャリア教育に関する学習の実施は、「生徒のキャリア発達を意識した総合的な学習の時間の授業」（１年84.5%、２年96.2%、３年92.0%）が最も高い。次いで「生徒のキャリア発達を意識した道徳・学級活動の授業」（１年83.9%、２年89.2%、３年86.5%）、「生徒のキャリア発達を意識した教科の授業」（１年60.8%、２年65.1%、３年69.9%）である。

・「１年」では、「自分を理解する学習（キャリア・カウンセリング、諸検査を含む）」が 76.35% と最も高い。次いで「将来設計全般に関する学習」が 60.2%、「職場の訪問や見学、職業の調査・研究活動」が 50.5% 等の順である。

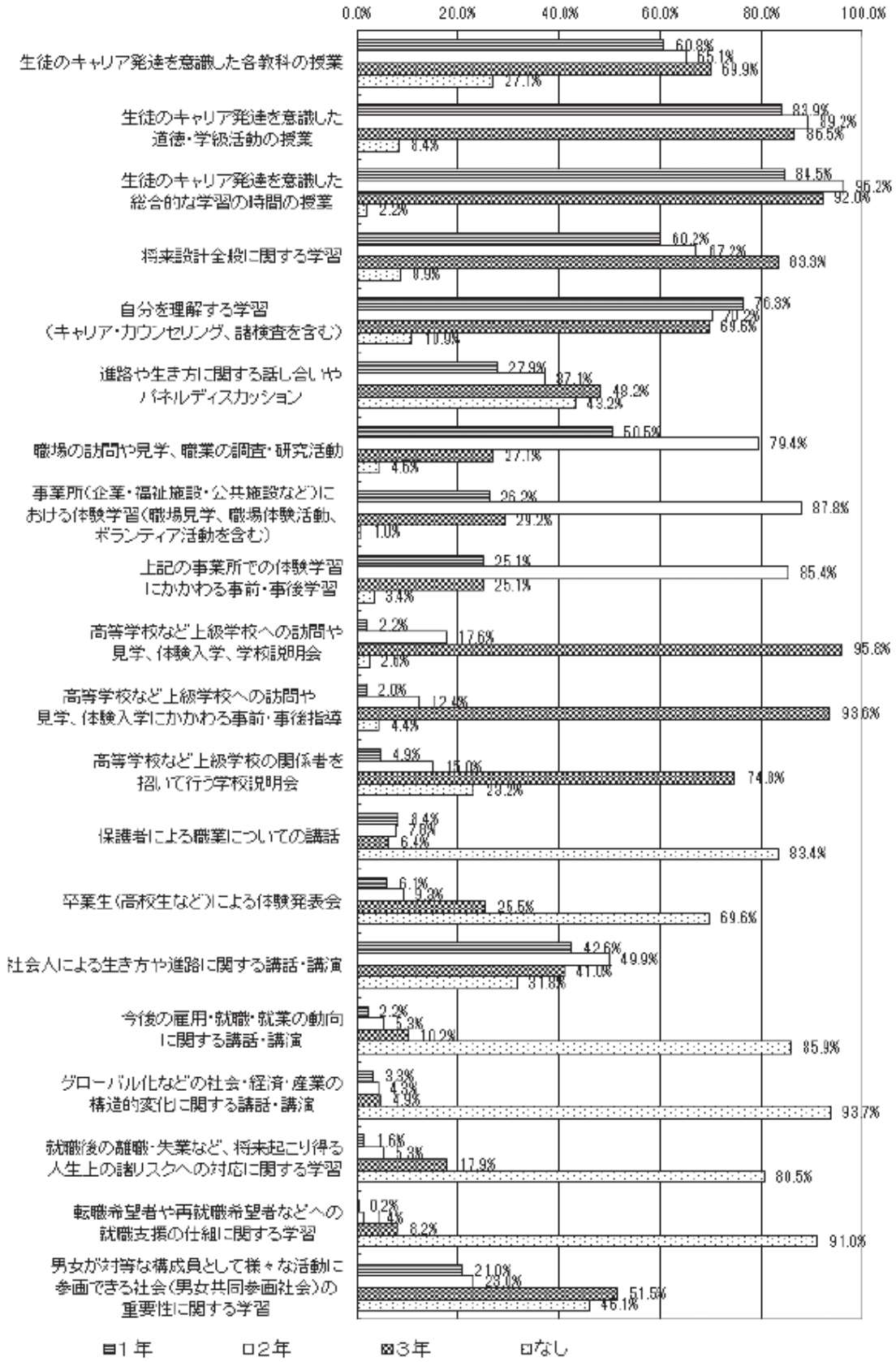
・「２年」では、「事業所（企業・福祉施設・公共施設など）における体験学習（職場見学、職場体験活動、ボランティア活動を含む）」が 87.8% と最も高い。次いで「上記の事業所での体験学習にかかわる事前・事後学習」が 85.4%、「職場の訪問や見学、職場の調査・研究活動」が 79.4% 等の順である。

・「３年」では、「高校等上級学校への訪問や見学、体験入学、学校説明会」が 95.8% と最も高い。次いで「高校等上級学校への訪問や見学、体験入学にかかわる事前・事後学習」が 93.6%、「将来設計全般に関する学習」が 83.3% 等の順である。

・どの学年でもあまり実施されていないのは、「グローバル化等の社会・経済・産業の構造的変化に関する講話・講演」が 93.7%、「転職希望者や再就職希望者などへの就職支援の仕組に関する学習」が 91.0%、「今後の雇用・就職・就業の動向に関する講話・講演」が 85.9% 等である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【キャリア教育に関する学習の機会や内容等の実施状況】



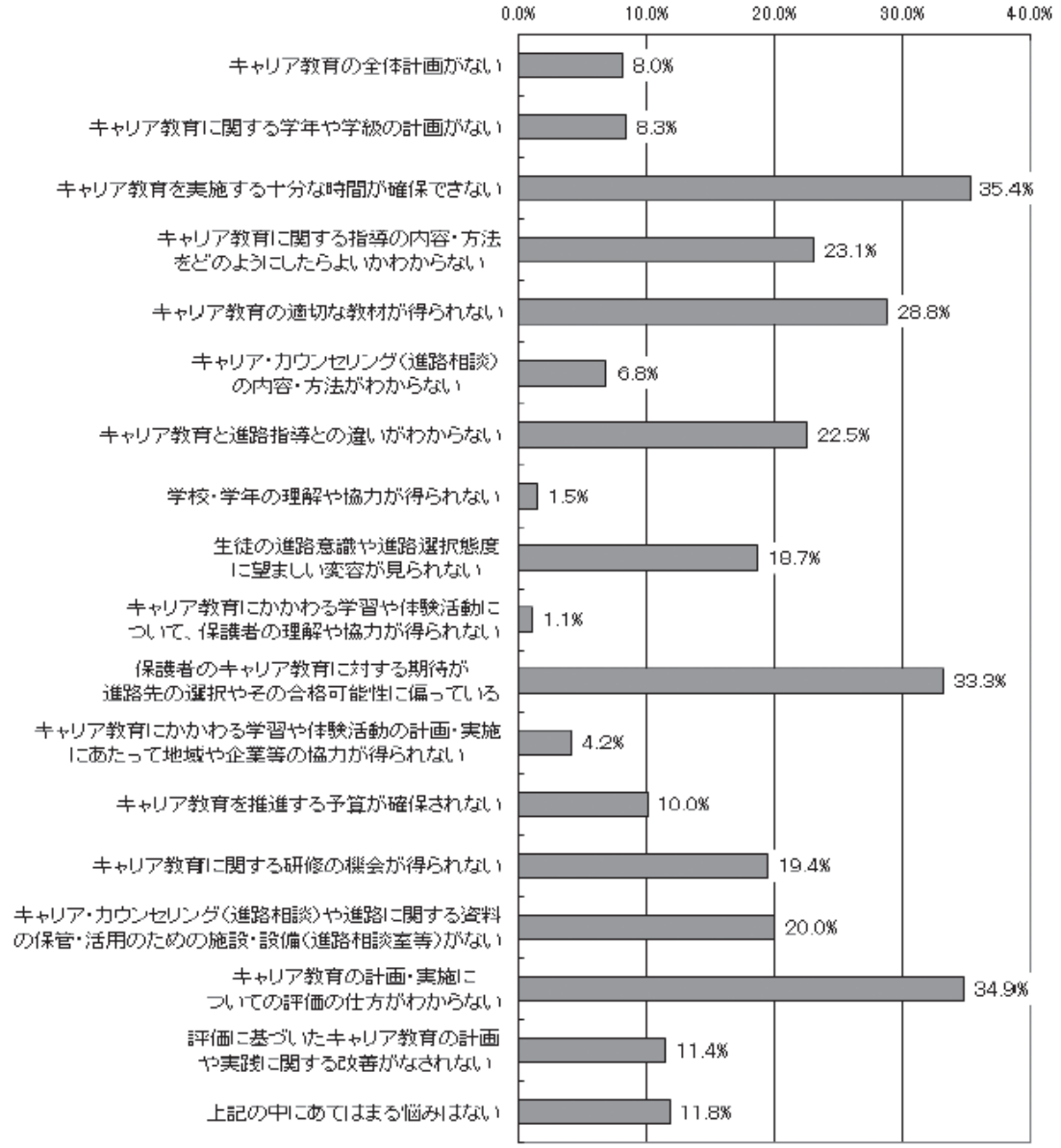
（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

⑤　キャリア教育について困ったり悩んだりしていること

・「キャリア教育を実施する十分な時間が確保できない」が 35.4％と最も高い。次いで「キャリア教育の計画・実施についての評価の仕方がわからない」が 34.9％、「保護者のキャリア教育に対する期待が進路先の選択やその合格可能性に偏っている」が 33.3％等である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【学校のキャリア教育について困ったり悩んだりしていること】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

⑥　キャリア教育を適切に行っていく上で今後重要になると思われること

・「とても重要だと思う」の割合では、「キャリア教育にかかわる体験的な学習（職場体験活動や社会人による講話など）の充実」が 62.5％と最も高い。次いで「キャリア・カウンセリング（進

路相談）の充実」が 61.4%、「キャリア教育にかかわる体験的な学習（職場体験活動や社会人による講話など）における事前・事後指導の充実」が 60.6%、「卒業後の就職や進学に関する情報資料の収集と活用」が 56.5% 等の順である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【キャリア教育を適切に行っていく上で今後重要になると思われること】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

２　働くことに対する考え方

①　中学校卒業後に働くことを希望する理由

・「とても思う」と「思う」を合わせた肯定的な回答の割合を比較すると、「社会人として早く自立したいから」が 82.4％と最も高い。次いで「勉強するより仕事をする方が向いていると思うから」が 76.4％、「若いうちに専門的な技術を身につけたいから」が 64.7％、「自分の学力では進学できそうにないから」が 58.8％等の順である。

・肯定的な回答の割合が低い項目は、「保護者や家族が就職をすすめるから」が 17.7％、「友人や先輩が就職をすすめるから」が５.9％、「先生が就職をすすめるから」が５.9％、である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【働くことを希望する理由】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

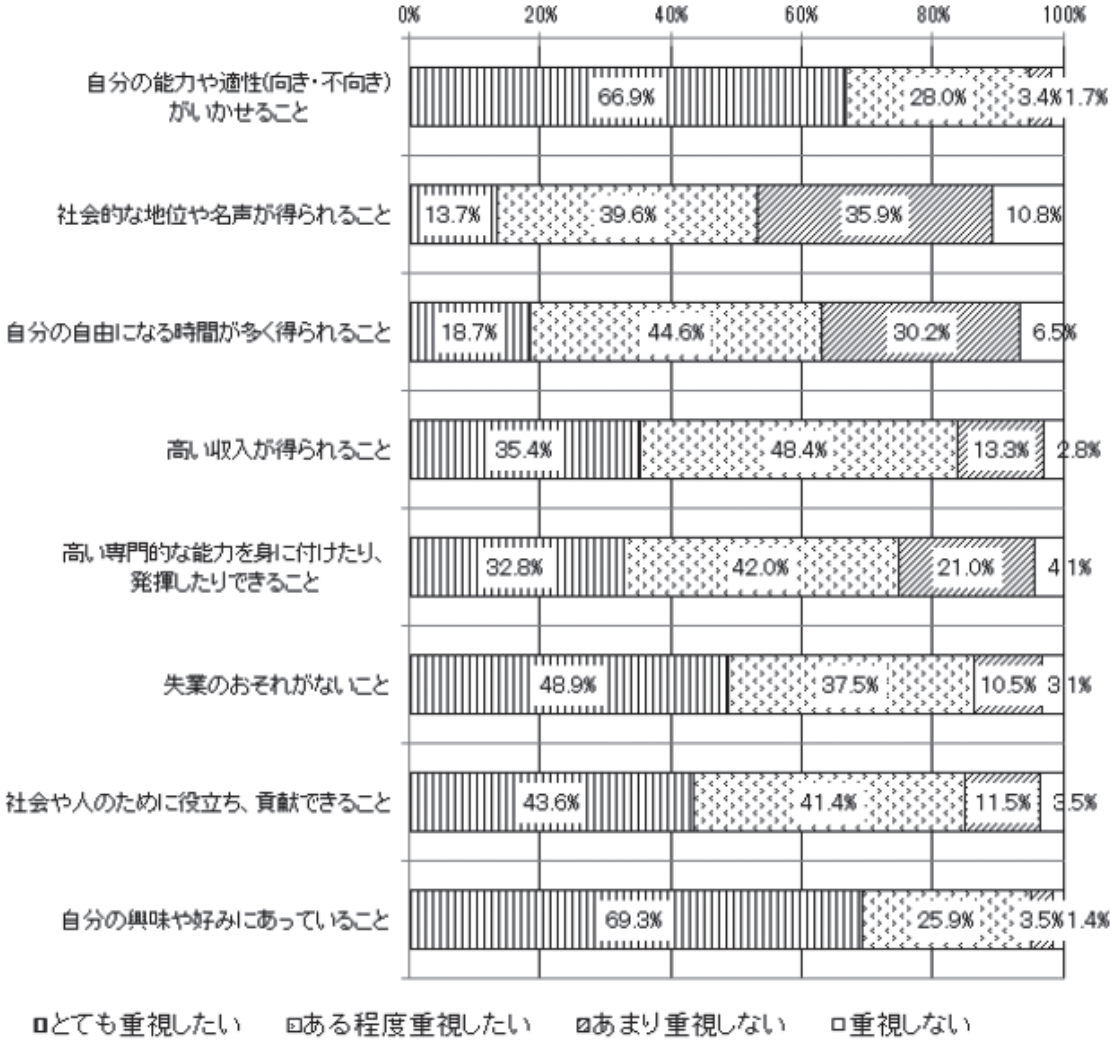
② 自分の職業や仕事を選ぶ際に重視すること

・「とても重視したい」と「ある程度重視したい」を合わせた肯定的な回答の割合を比較すると、「自分の興味や好みにあっていること」が 95.2%と最も高い。次いで「自分の能力や適性（向き・不向き）がいかせること」が 94.9%、「失業のおそれがないこと」が 86.4%等の順である。

・肯定的な回答の割合が低い項目は、「高い専門的な能力を身に付けたり、発揮したりできること」が 74.8%、「自分の自由になる時間が多く得られること」が 63.3%、「社会的な地位や名声が得られること」が 53.3%等の順である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【自分の職業や仕事を選ぶ際に重視すること】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

③　将来の生き方や進路を考える上で役立った指導内容

・「役に立った」と「少しは役に立った」を合わせた割合を比較すると、「様々な教科における日々の授業」が 93.1％と最も高い。次いで「部活動などの課外活動」が 85.5％、「係活動・委員会活動や生徒会活動などの日々の活動」が 84.6％、「職場での体験活動」が 84.1％、「卒業後の進路（進学や就職）についての相談」が 82.8％、「職場の見学」が 81.4％等の順である。

・「役に立った」と「少しは役に立った」を合わせた割合が低い項目は、「将来の（転職希望者や再就職希望者などへの）就職支援の仕組みについての学習」が 54.8％、「就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応についての学習」が 53.4％、「卒業生の体験発表会」が 52.2％等の順である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

職場体験活動の事前指導・事後指導をどうするか

中学校において平成24年度から全面実施となった学習指導要領においては、従前の学習指導要領からの「主な改善事項」の一つに「体験活動の充実」が挙げられています。中学校でのキャリア教育に焦点を絞れば、職場体験活動の一層の充実はとりわけ重要な課題であると言えるでしょう。

そして、職場体験活動をはじめとする様々な体験活動の実施に当たっては、「その場限りの活動で終わらせることなく、事前に体験活動を行うねらいや意義を子どもに十分に理解させ、活動についてあらかじめ調べたり、準備したりすることなどにより、意欲をもって活動できるようにするとともに、事後に感じたり気付いたりしたことを自己と対話しながら振り返り、文章でまとめたり、伝え合ったりすることなどにより他者と体験を共有し、広い認識につなげる必要がある」（中央教育審議会答申、平成20年1月）と指摘されていることを、今一度ここで確認したいと思います。

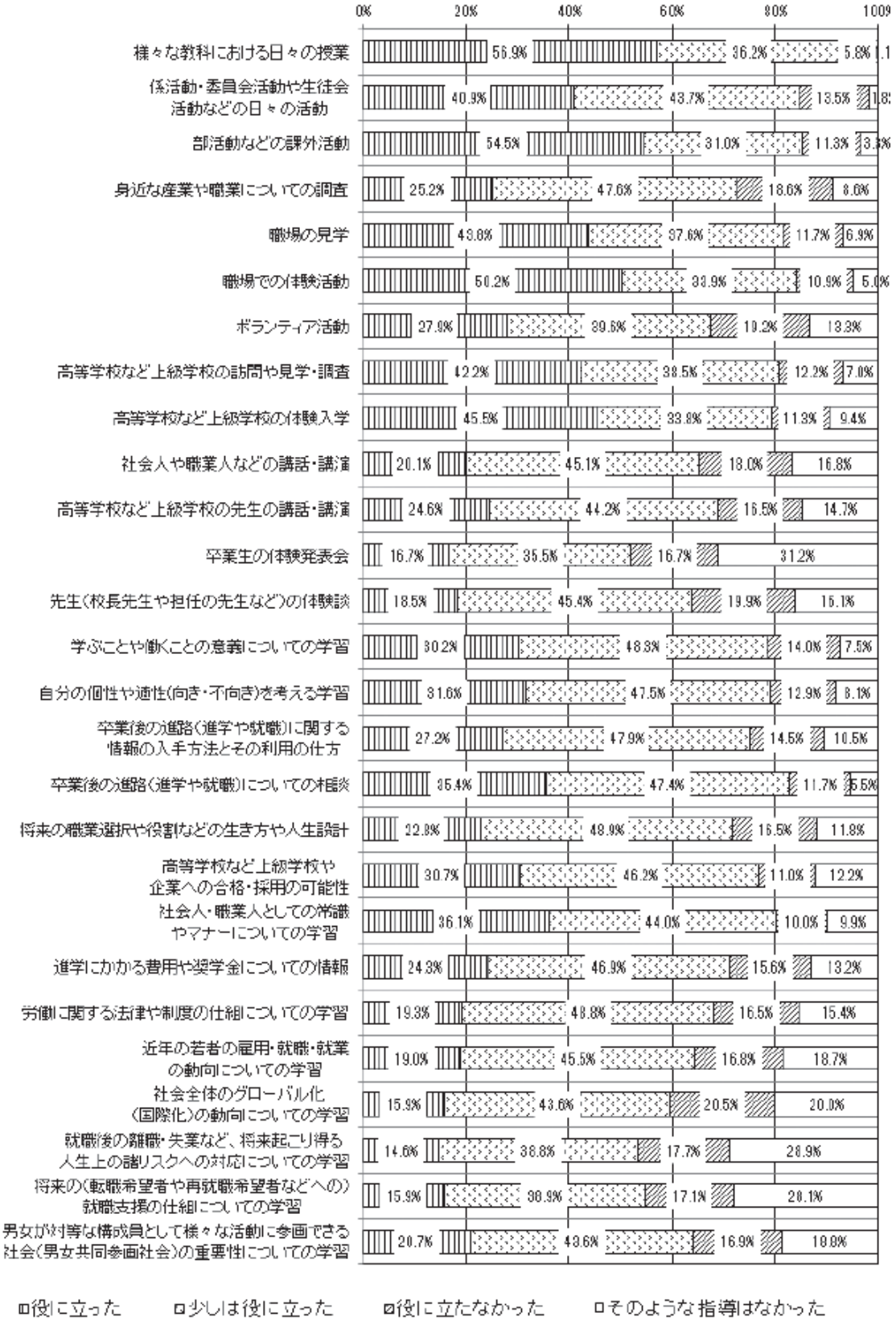
事前指導として特に重要なのは、「ねらいや意義」を十分に理解させることです。何を学ぶために職場に行くのか、その学びを実現するために職場で自分は何を見て、どのような行動をとれば良いのか。一人一人にこの点をしっかりと認識させ、受け入れて下さる事業所や保護者の皆様も含めて共有することが何より重要でしょう。

職場体験活動に限らず、体験活動の成果は、本人の課題意識や基礎知識に大きく左右されます。ややもすると、「つつがなく数日間を過ごさせるための指導」に焦点が絞られがちな事前指導ですが、職場に向かう生徒たちの意識や視野に直接働きかける教育活動であることを改めて認識したいものです。

このような事前指導があってこそ、体験自体の質も高まり、事後指導においても「他者と体験を共有」すべきポイントが明確になるといえるのではないでしょうか。そしてそれは、職場体験後の体系的なキャリア教育を一層充実させることにもつながると考えます。

筑波大学人間系　教授　藤田　晃之

【将来の生き方や進路を考える上で役立った指導内容】



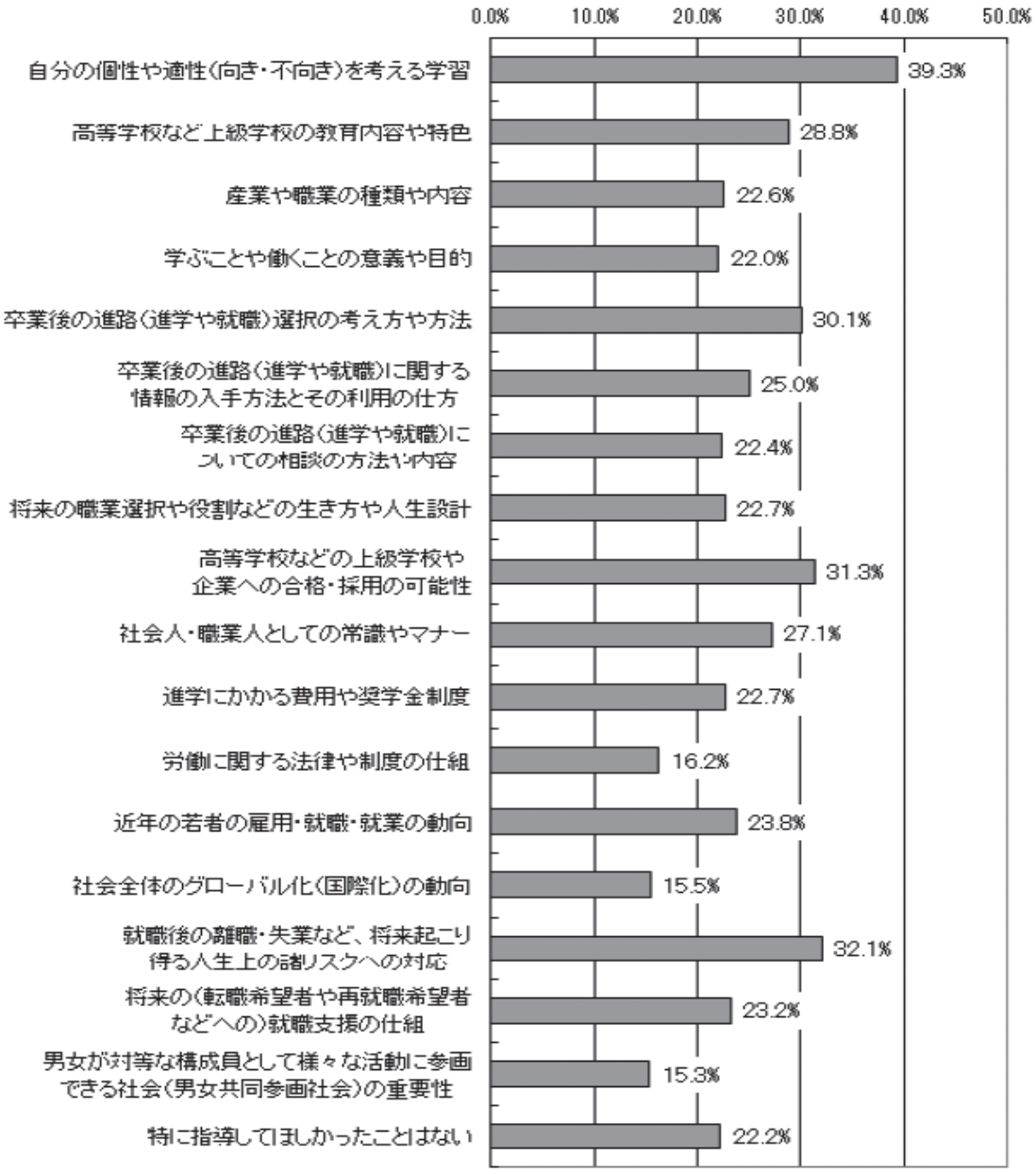
（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

④　将来の生き方や進路について考えるために指導して欲しかったこと

・「自分の個性や適性（向き・不向き）を考える学習」の割合が 39.3％と最も高い。次いで「就職後の離職・失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応」が 32.1％、「高等学校などの上級学校や企業への合格・採用の可能性」が 31.3％、「卒業後の進路（進学や就職）選択の考え方や方法」が 30.1％、「高等学校などの上級学校の教育内容や特色」が 28.8％ 等の順である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【将来の生き方や進路について考えるために指導して欲しかったこと】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

3　体験的学習の取組み状況

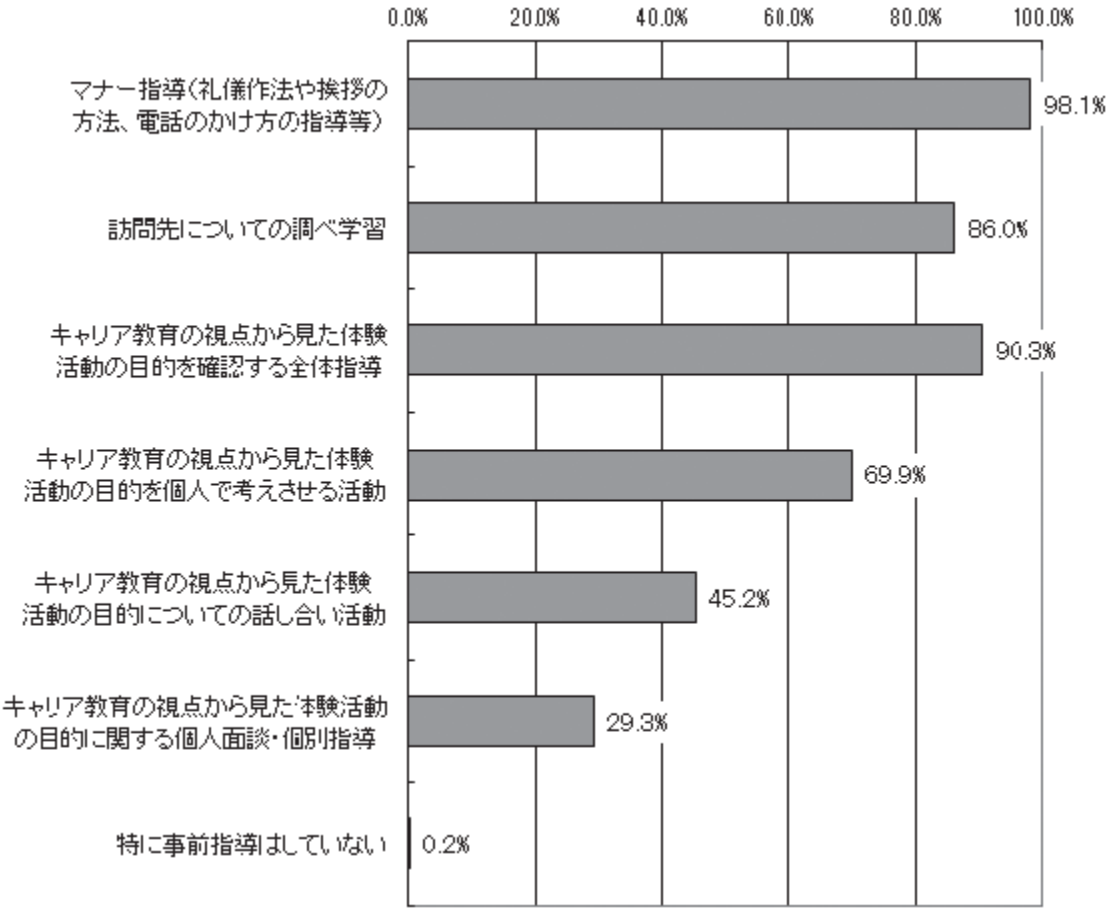
①　職場体験活動の事前指導の内容

・「マナー指導（礼儀作法や挨拶の方法、電話のかけ方の指導等）」の割合が 98.1％と最も高い。次いで「キャリア教育の視点から見た体験活動の目的を確認する全体指導」が 90.3%、「訪問先についての調べ学習」が 86.0％、「キャリア教育の視点から見た体験活動の目的を個人で考えさせる活動」が 69.9％等の順である。

・割合が低いのは、「キャリア教育の視点から見た体験活動の目的についての話し合い活動」が 45.2％、「キャリア教育の視点から見た体験活動の目的に関する個人面談・個別指導」が 29.3％等である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【職場体験活動の事前指導の内容】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

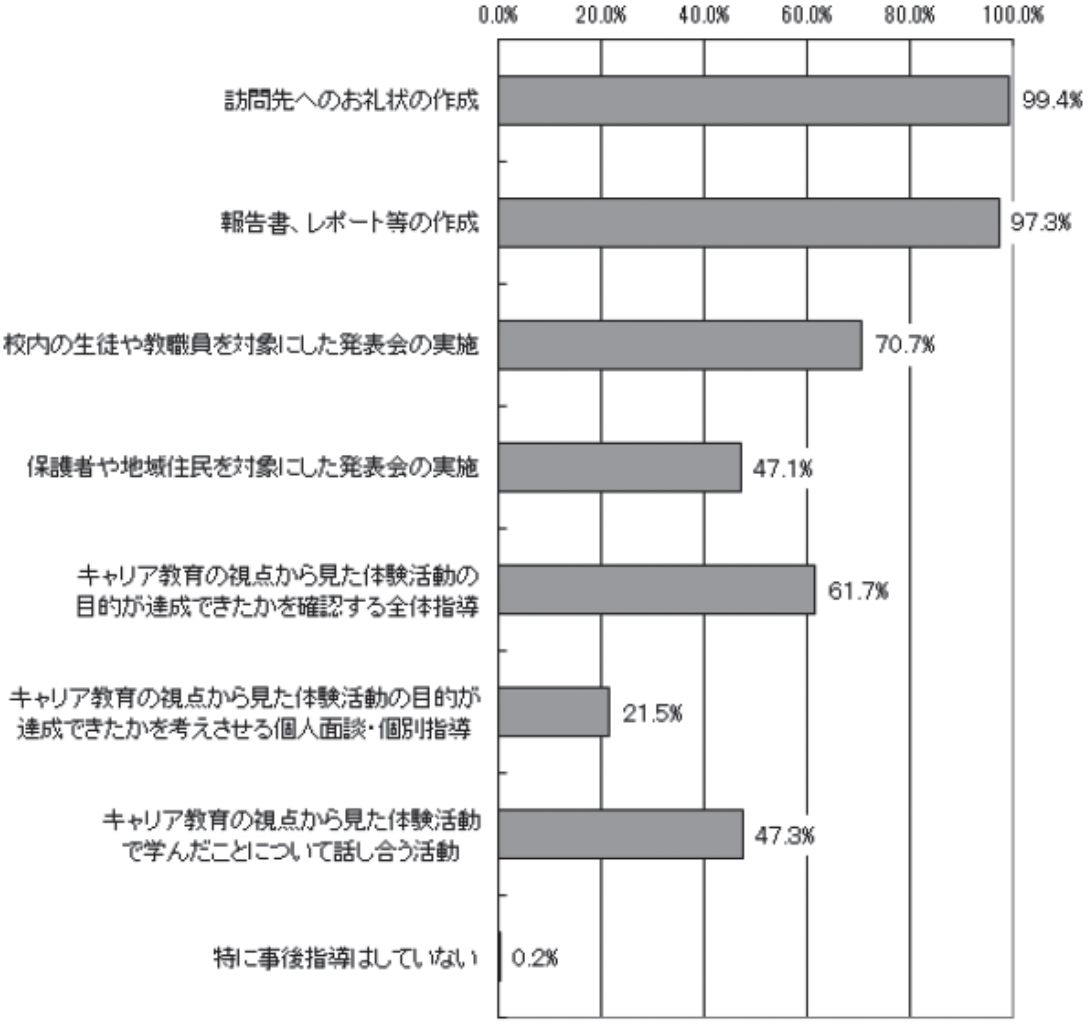
② 職場体験活動の事後指導の内容

・「訪問先へのお礼状の作成」が 99.4％と最も高い。次いで「報告書、レポート等の作成」が 97.3％、「校内の生徒や教職員を対象にした発表会の実施」が 70.7％、「キャリア教育の視点から見た体験活動の目的が達成できたかを確認する全体指導」が 61.7％等の順である。

・割合が低いのは、「キャリア教育の視点から見た体験活動の目的が達成できたかを考えさせる個人面談・個別指導」の 21.5％である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【職場体験活動の事後指導の内容】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月

４　キャリア教育に関する保護者の考え方

①　キャリア教育や進路指導において期待する学習内容

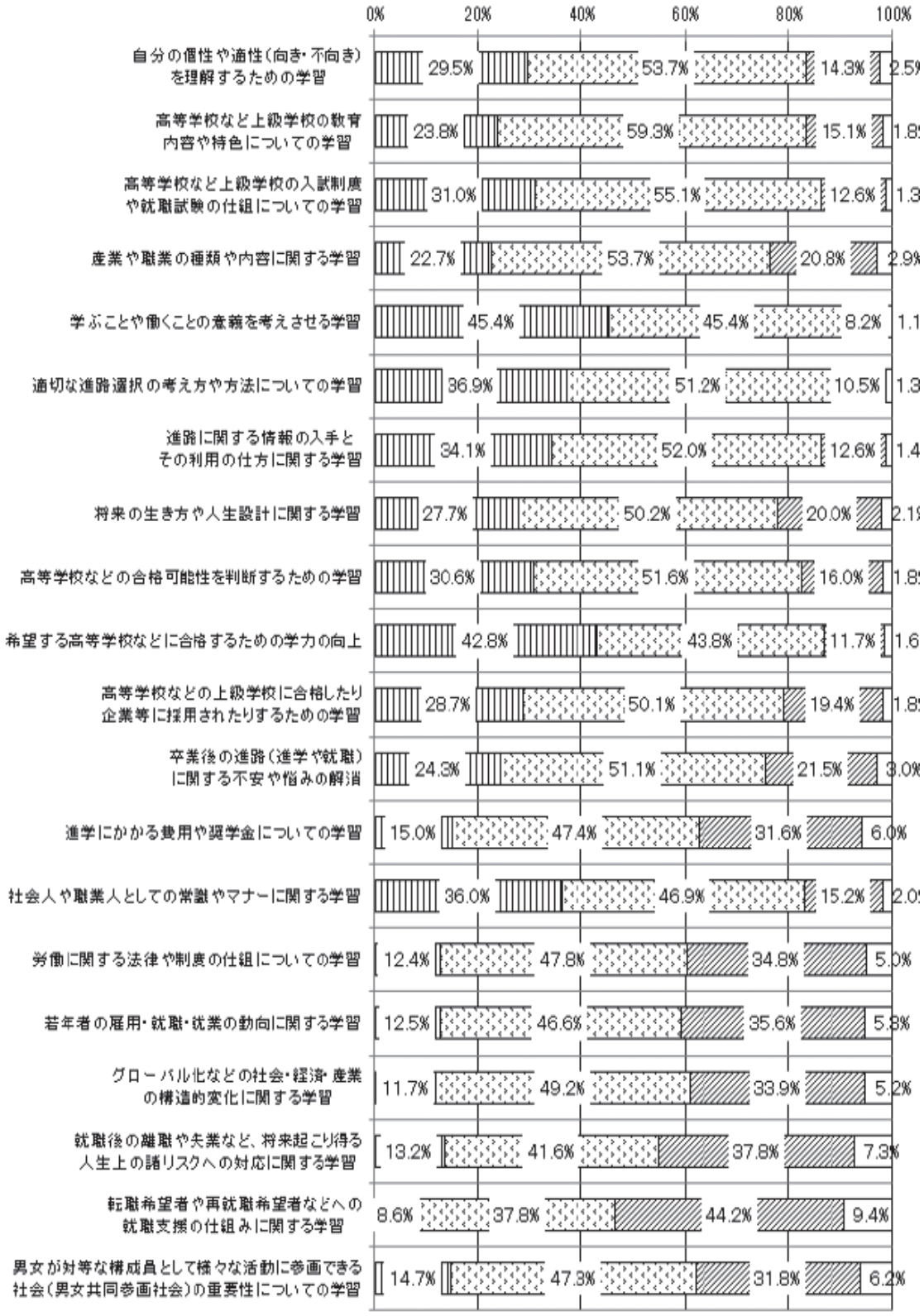
・「とても期待している」割合についてみると、「学ぶことや働くことの意義を考えさせる学習」が 45.4％で最も高い。次いで「希望する高等学校などに合格するための学力の向上」が 42.8％、「適切な進路選択の考え方や方法についての学習」が 36.9% 等の順である。

・「とても期待している」と「ある程度期待している」を合計した割合を見ると、「学ぶことや働くことの意義を考えさせる学習」が 90.8％と最も高い。次いで「適切な進路選択の考え方や方法についての学習」が 88.1％、「希望する高等学校などに合格するための学力の向上」が 86.6% 等の順である。

・「期待していない」と「あまり期待していない」を合計した割合では、「転職希望者や再就職希望者などへの就職支援の仕組みに関する学習」が 53.6％、「就職後の離職や失業など、将来起こり得る人生上の諸リスクへの対応に関する学習」が 45.1％、「若年者の雇用・就職・就業の動向に関する学習」が 40.9％等の順である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【キャリア教育や進路指導において期待する学習内容】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

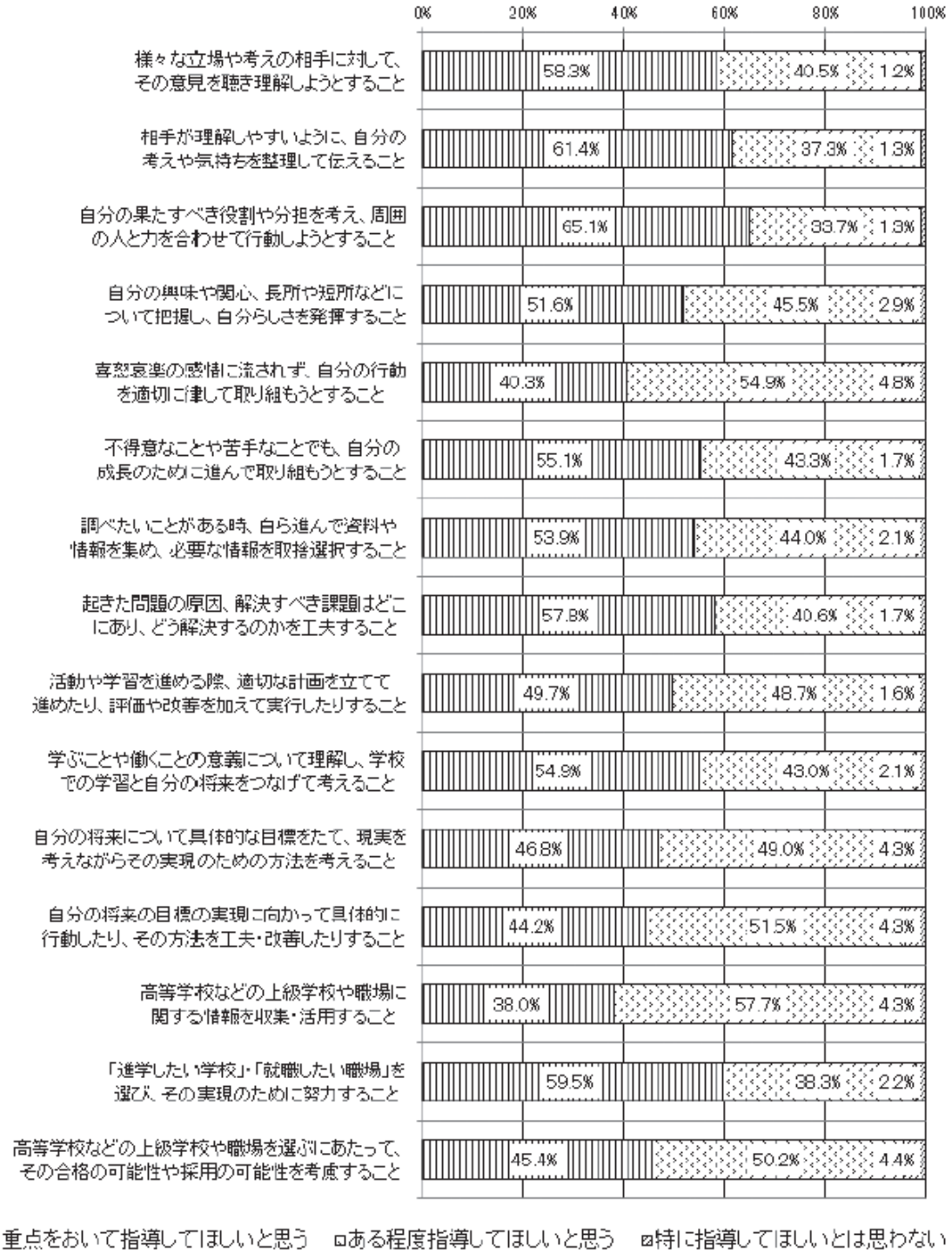
② 学校における授業や生活で指導してほしいこと

・「重点をおいて指導してほしいと思う」割合は、「自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとすること」が65.1％と最も高い。次いで「相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝えること」が61.4％、「『進学したい学校』・『就職したい職場』を選び、その実現のために努力すること」が59.5％等である。

・「重点をおいて指導してほしいと思う」と「ある程度指導してほしいと思う」を合計した割合では、「様々な立場や考えの相手に対して、その意見を聴き理解しようとすること」と「自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとすること」で、98.8％、「相手が理解しやすいように、自分の考えや気持ちを整理して伝えること」が98.7％等の順である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【学校における授業や生活で指導してほしいこと】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

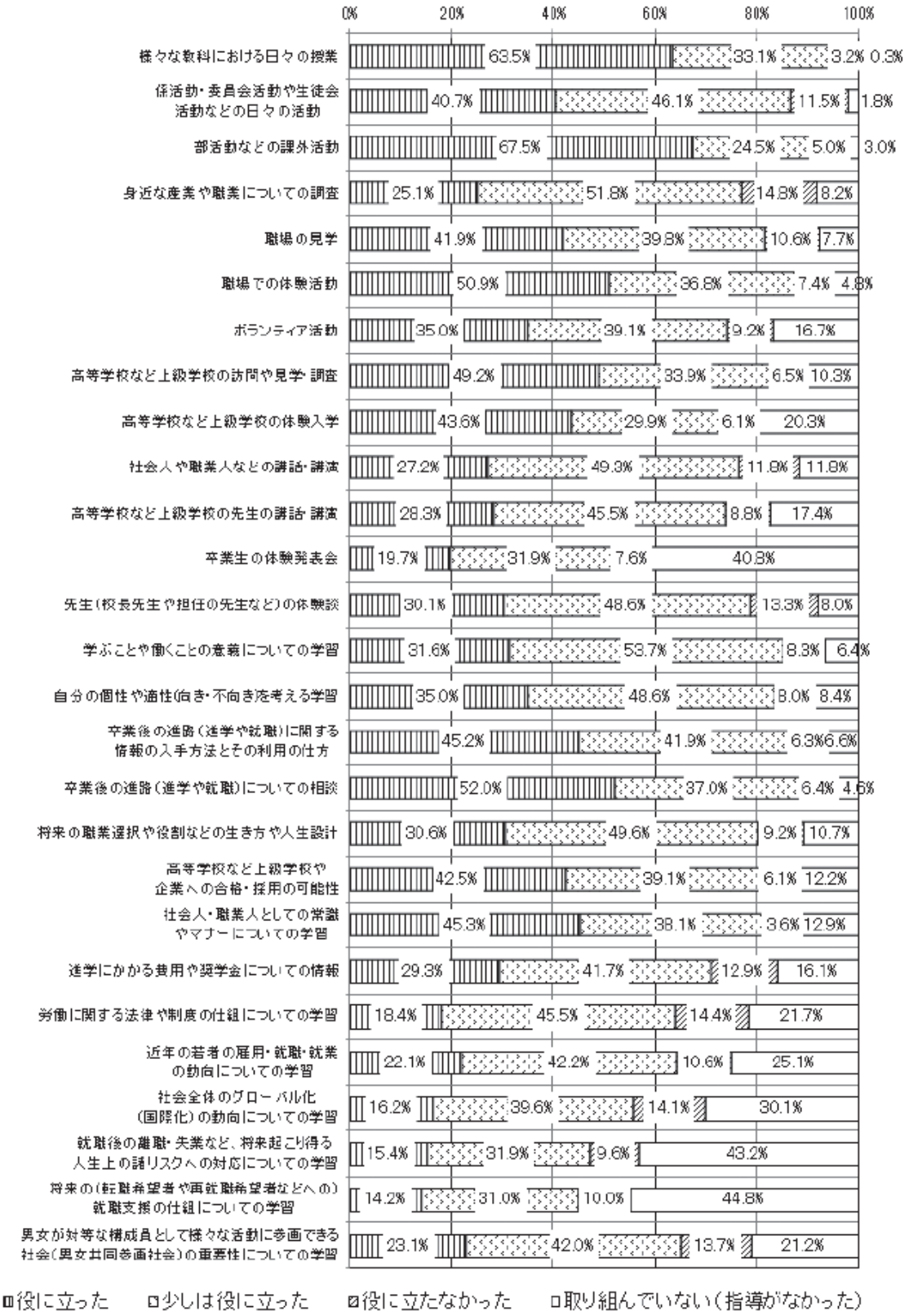
5　卒業者の考え方

①　中学校の時に将来の生き方や進路を考える上で役立った学習や指導

・「役に立った」と「少しは役に立った」を合わせた割合をみると、「様々な教科における日々の授業」が 96.6％と最も高い。次いで「部活動などの課外活動」が 92.0％、「卒業後の進路（進学や就職）についての相談」が 89.0％、「職場での体験活動」が 87.7％、「卒業後の進路（進学や就職）に関する情報の入手方法とその利用の仕方」が 87.1％、「係活動・委員会活動や生徒会活動などの日々の活動」が 86.8％、「学ぶことや働くことの意義についての学習」が 85.3％等の順である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【中学校の時に将来の生き方や進路を考える上で役立った学習や指導】



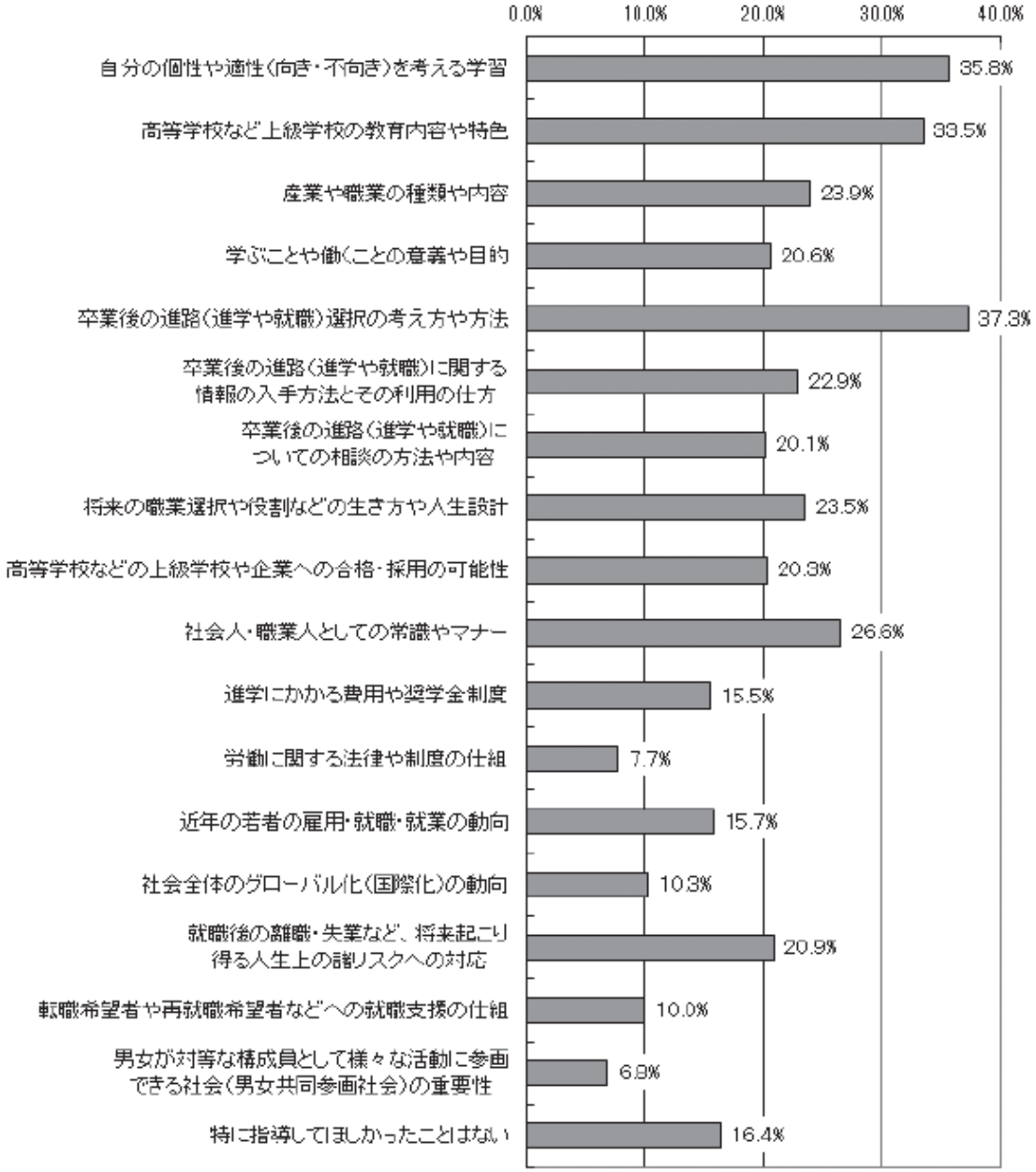
（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

② 中学校の時に将来の生き方や進路について考えるために指導してほしかったこと

・「卒業後の進路（進学や就職）選択の考え方や方法」が 37.3％と最も高い。次いで「自分の個性や適性（向き・不向き）を考える学習」が 35.8％、「高等学校など上級学校の教育内容や特色」が 33.5％、「社会人・職業人としての常識やマナー」が 26.6％、「産業や職業の種類や内容」が 23.9％等の順である。

（参考：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月を基に作成）

【中学校の時に将来の生き方や進路について考えるために指導してほしかったこと】



（資料出所：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」2013年３月）

Part 1

中学校の部

第3章

中学校での
キャリア教育の実践
（職場体験前と体験後）

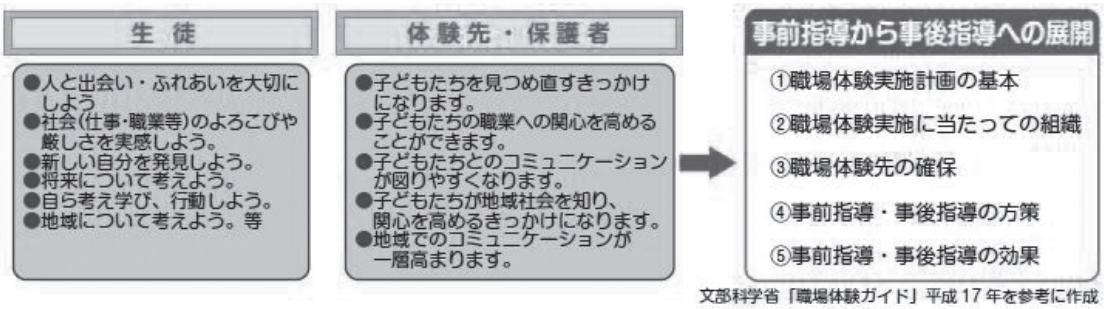
1　職場体験充実のための留意事項

①　職場体験の基本的な考え方

・子ども・若者に自らの将来を考えさせるためには、学校内における教育活動だけでなく、具体的に多様な年齢、立場の人や社会や職業にかかわる様々な現場を通して、自己と社会の双方についての多様な気付きや発見を経験させることが効果的である。
・職場体験活動は、毎年繰り返されて行われている活動であるが、生徒にとってはその都度新鮮な体験となることを踏まえ、生徒の実態に即した創造性ある実践が求められる。
・実践に際しては、職場体験のねらいや目的を明確にし、生き方の指導を含めた事前・事後指導の充実、５日間の職場体験の実施等における質的向上を図る職場体験実施計画の立案が重要となる。
・職場体験の実践においては、保護者、体験先（事業所等）、職場体験支援組織等との連携や条件の整備が必要不可欠である。そして、各教科書、教育活動全体との関連を意図して計画的、系統的に実施されることが望ましい。
・中学校での職場体験が、上級学校におけるインターンシップや将来への職業意識の向上につながることを意図した教育活動となるよう、上級学校との連携も求められる。

（出典：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011 年3 月）

【各学校の職場体験のねらい（例）】



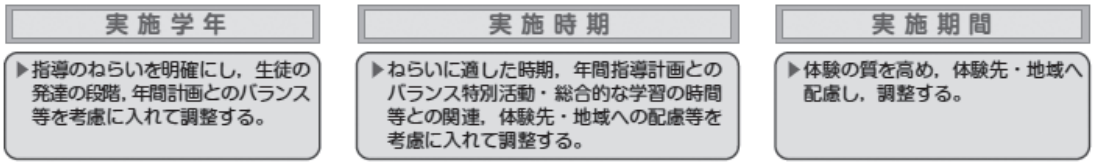
（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

②　職場体験実施計画の基本

・職場体験のねらいは、各学校の状況によって様々である。そのねらいを基盤にして、学校の教育活動への位置付け（実施学年、日程等）、地域性（体験先との連携）、事前・事後指導等を考慮し、実施計画を立案することが重要である。
・職場体験活動を一過性のものに終わらせるのではなく、将来の夢や職業、働くことなど、自分の生き方について考えることができるよう、キャリア発達を促進するという視点から３年間を見通した体系的な実施計画を立てて、実践していくことが望まれる。

（出典：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011 年3 月）

【職場体験の運営にかかわるポイント】



（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

③　事前指導・事後指導

（効果）

・職場体験活動を実施した効果としては、勤労観・職業観の芽生えによる職業や働くことへの関心が高まったことや、前向きに自己の将来を設計することができること、自らの意思と責任による進路選択ができること、積極的に人間関係を形成しようとする雰囲気が高まったことなどが挙げられている。これらの効果は、職場体験活動実施期間中だけでなく、事前・事後における指導の充実により得られるものである。

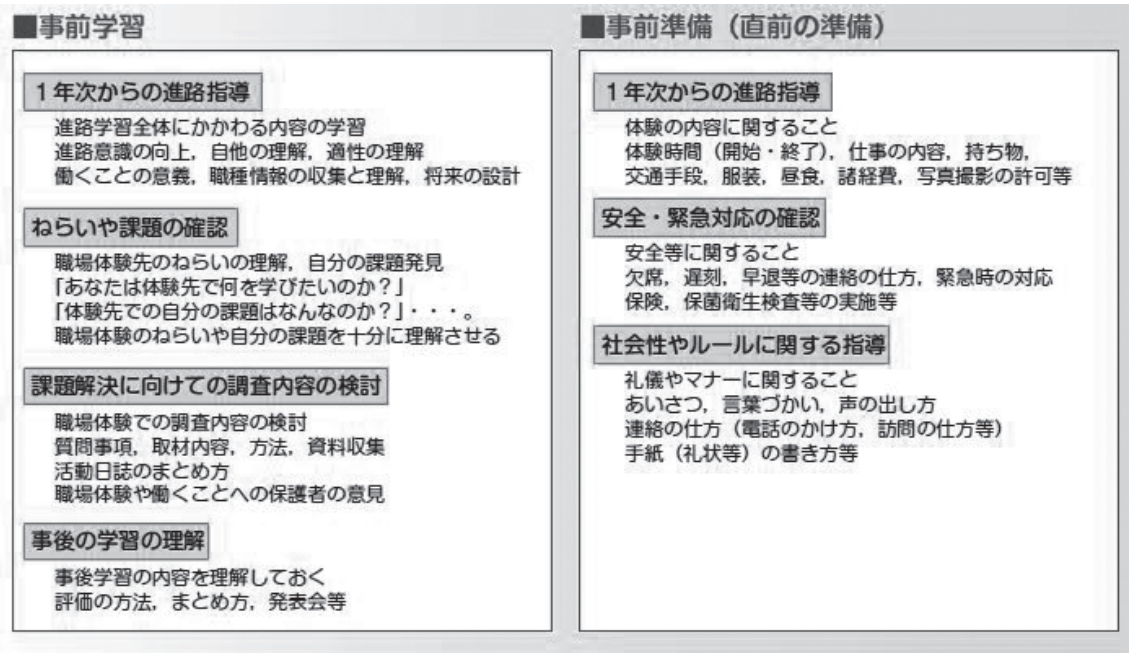
（方策）

・職場体験活動の事前指導では、特に生徒がその意義やねらいを十分に理解し、自分なりに目標をもって臨むことができるように指導することが大切である。
・事前指導は、事前学習と事前準備（直前の準備）とに分けて考えられる。
・事前学習では、職場体験のねらいを明確にし、自己の課題を発見することが重要である。
・事前学習において、事後の学習の内容を理解しておくことも大切である。事後指導では、生徒にとってお互いの体験が共有できるようにしたり、働くことの意義などを振り返り、再考し、明確化できるようにしたりして、指導内容・方法を工夫して進めることが重要であるが、事前学習が浅ければ、事後学習も浅くならざるを得ず、その後の学習へのインパクトも小さくなってしまう。このことから、事前学習を充実させることが職場体験の充実につながるとともに、キャリア教育の取組全体の充実につながっていく。

（出典：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

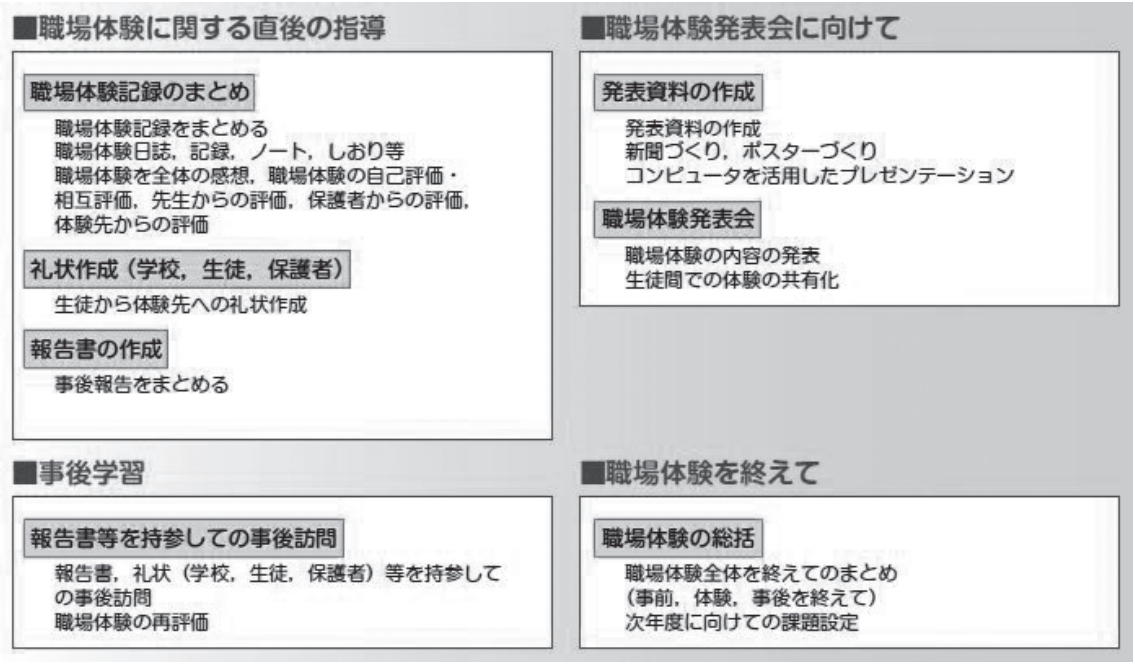
【事前指導と事後指導のポイント（実施学年を２年次とした場合)】

〇事前指導



（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

○事後指導



（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

２　職場体験を成功させるために生徒が理解すべきこと

事前・実施中・事後

① 職場体験の目的と自分の課題
② 体験及び体験先（受入れ事業所）の情報
③ 健康管理や安全管理上の配慮

３　職場体験を成功させるために生徒が実践すべきこと

事前・実施中・事後

① 社会性やマナーの観点
② 健康管理・安全配慮の観点

４　職場体験実施担当者が理解し、実践すべきこと

事前・実施中・事後

① 生徒指導の観点
② 体験先・地域との関係性の観点
③ 家庭・保護者との関係性の観点

Part 1

中学校の部

第4章

キャリア教育推進につなげるためのプログラム開発

◆第１節　各教科の科目目標におけるキャリア教育の取組み

・キャリア教育は、現在の学校教育を見直す理念を示すものであることから、その活動は特定の新しい教育活動を指すものではなく、学校教育全体の活動を通じて体系的に行われる必要があり、特に、子ども・若者が実社会を体験し、それを基に自ら考える活動が不可欠である。
・各教科、道徳、総合的な学習の時間及び特別活動が、それぞれ社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力としての「基礎的・汎用的能力」の育成にどのように貢献できるのかを考え、実践に移すためには、まず学習指導要領に示される各教科等とキャリア教育との関連性について正しく理解し、その上で、各教科等の特質と単元や題材などの内容を生かした創意・工夫が必要となる。

（出典：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

１　国語

①　教科の目標

・国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

（出典：文部科学省「中学校学習指導要領」2008年３月

②　キャリア教育の取組み

・基礎的・汎用的能力の一つである「人間関係形成・社会形成能力」は、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聞いて自分の考えを正確に伝えることができる力であり、自分のおかれている状況を受け止め、役割を果たしつつ、他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力でもある。
・「人間関係形成・社会形成能力」は、相手の立場や考えを尊重し合うことのできる能力を基本としていることから、この力の育成は、実際に話したり聞いたりする音声言語活動を重視することが大切である。
・常に目的意識や場面意識をもって「話す」「聞く」ことにより、生徒は目的や場面の状況を踏まえ、相手に応じて生き生きと話したり、聞いたり、話し合ったりすることができる能力と、豊かな人間関係を築いていくことのできる能力を身に付けられる。
・「基礎的・汎用的能力」の育成に当たっては、言語活動を通して国語科で培う力が必要不可欠であることから、国語科での言語活動は大きなカギを握っている。

（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する国語科の指導内容の例】

学年/能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
第1学年	「話すこと・聞くこと」 ・全体と部分，事実と意見との関係に注意して話を構成し，相手の反応を踏まえながら話す。	「話すこと・聞くこと」 ・質問しながら聞きとり，自分の考えとの共通点や相違点を整理する。	「書くこと」 ・考えや気持ちを，根拠を明確にして書く。	「読むこと」 ・本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身に付け，目的に応じて必要な情報を読み取る。
第2学年	「話すこと・聞くこと」 ・異なる立場や考えを想定して自分の考えをまとめ，話の中心的な部分と付加的な部分などに注意し，論理的な構成や展開を考えて話す。	「読むこと」 ・文章に表れているものの見方や考え方について，知識や体験と関連付けて自分の考えをもつ。	「書くこと」 ・説明や具体例を加えたり，描写を工夫したりして書く。	「読むこと」 ・多様な方法で選んだ本や文章などから，適切な情報を得て，自分の考えをまとめる。
第3学年	「話すこと・聞くこと」 ・場の状況や相手の様子に応じて話すとともに，敬語を適切に使う。	「読むこと」 ・文章を読んで人間，社会，自然などについて考え，自分の意見をもつ。	「話すこと・聞くこと」 ・資料などを活用して説得力のある話をする。	「書くこと」 ・社会生活の中から課題を決め，取材を繰り返しながら自分の考えを深めるとともに，文章の形態を選択して適切な構成を工夫する。

※〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕は，「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の指導と関連させて指導することが基本になる。

（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

２　社会

①　教科の目標

・広い視野に立って、社会に対する関心を高め，諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

・地理的分野：①日本や世界の地理的事象に対する関心を高め、広い視野に立って我が国の国土及び世界の諸地域の地域的特色を考察し理解させ、地理的な見方や考え方の基礎を培い、我が国の国土及び世界の諸地域に関する地理的認識を養う。②日本や世界の地域の諸事象を位置や空間的な広がりとのかかわりでとらえ、それを地域の規模に応じて環境条件や人間の営みなどと関連付けて考察し、地域的特色や地域の課題をとらえさせる。③大小様々な地域から成り立っている日本や世界の諸地域を比較し関連付けて考察し、それらの地域は相互に関係し合っていることや各地域の特色には地方的特殊性と一般的共通性があること、また、それらは諸条件の変化などに伴って変容していることを理解させる。④地域調査など具体的な活動を通して地理的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に選択、活用して地理的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力や態度を育てる。

・歴史的分野：①歴史的事象に対する関心を高め、我が国の歴史の大きな流れを、世界の歴史を背景に、各時代の特色を踏まえて理解させ、それを通して我が国の伝統と文化の特色を広い視野に立って考えさせるとともに、我が国の歴史に対する愛情を深め、国民としての自覚を育てる。②国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物と現在に伝わる

文化遺産を、その時代や地域との関連において理解させ、尊重する態度を育てる。③歴史に見られる国際関係や文化交流のあらましを理解させ、我が国と諸外国の歴史や文化が相互に深くかかわっていることを考えさせるとともに、他民族の文化，生活などに関心をもたせ、国際協調の精神を養う。④身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。

・公民的分野：①個人の尊厳と人権の尊重の意義、特に自由・権利と責任・義務の関係を広い視野から正しく認識させ、民主主義に関する理解を深めるとともに、国民主権を担う公民として必要な基礎的教養を培う。②民主政治の意義、国民の生活の向上と経済活動とのかかわり及び現代の社会生活などについて、個人と社会とのかかわりを中心に理解を深め、現代社会についての見方や考え方の基礎を養うとともに、社会の諸問題に着目させ、自ら考えようとする態度を育てる。③国際的な相互依存関係の深まりの中で、世界平和の実現と人類の福祉の増大のために、各国が相互に主権を尊重し、各国民が協力し合うことが重要であることを認識させるとともに、自国を愛し、その平和と繁栄を図ることが大切であることを自覚させる。④現代の社会的事象に対する関心を高め、様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し、事実を正確にとらえ、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。

（出典：文部科学省「中学校学習指導要領」2008年３月）

② キャリア教育の取組み

・社会科の学習は、単なる知識の習得にとどまらず、生徒が自ら様々な社会的事象から課題を見出し、その課題を解決するために、身に付けた知識や技能を活用して追究・まとめ・発表する過程を通して、社会に対する関心を高めるとともに、社会の形成者として望ましい態度を身に付けることを目指している。

・このことは、生徒が「生きる力」を身に付け、激しく変化する社会の中で、それぞれが直面するであろう様々な問題に柔軟にかつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくことができるようにするキャリア教育の意義と深く結びつくものである。

（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する社会科の指導内容の例】

人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
・課題追究の中で，様々な意見を取り入れて考えを深める。 ・地域の一員として地域の課題に取り組み，自分なりの解釈を加えての論述や意見交換をする。 ・ポスターセッションなどで互いの意見を交換する。 ・郷土の施設の活用や地域の人々とのふれあいをもつ。 ・現代社会と自分の生活とのかかわりについて考える。 ・現代社会の課題とその解決策について話し合う。	・日本と世界の諸地域，都市部と農村部など地理的特色をとらえる上で，様々な視点があることに気付く。 ・身近な地域の歴史など様々な視点から歴史をとらえる。 ・歴史的事象や歴史上の人物のつながりをとらえる。 ・自由と権利，責任と義務の関係について理解し，現代社会の仕組みについて考える。	・様々な統計資料や地図を比較・関連させることによって，資料の読解力や読図力，作図力を身に付ける。 ・調査や観察の結果を主題図やグラフなどにまとめる。 ・年表を使って時代の流れをまとめる。 ・歴史的事象の背景などを解釈する。 ・歴史的事象の原因や結果などを自分の言葉でまとめる。 ・シミュレーションやロールプレイなどを通し，様々な社会事象の仕組みを理解し，より良い在り方について考える。	・様々な産業の種類や内容，課題などについて理解し，そこでの生活の様子に目を向ける。 ・日本や地域が抱える課題や将来像について考える。 ・日本の伝統や文化への関心を高める。 ・人々の日々の営みに目を向ける。 ・歴史上の人物の生き方について自分と比較して考える。 ・社会生活の様々な仕組みや現代社会の課題について理解し，身近な生活や自分の将来と結び付けて考える。

（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

３　数学

①　教科の目標

・数学的活動を通して、数量や図形などに関する基礎的な概念や原理・法則についての理解を深め、数学的な表現や処理の仕方を習得し、事象を数理的に考察し表現する能力を高めるとともに、数学的活動の楽しさや数学のよさを実感し、それらを活用して考えたり判断したりしようとする態度を育てる。

（出典：文部科学省「中学校学習指導要領」2008年３月）

②　キャリア教育の取組み

・数学的活動は、具体物を用いて考えたり、実際に体験したりするなどの活動から、思考を中心とした活動までの幅広い範囲の活動を含む。この数学的活動の中に、「説明し伝え合う活動」があり、中学校第３学年まで各学年それぞれにおいて実施することが求められている。

・数学的活動を、例えば、基礎的・汎用的能力の一つである「人間関係形成・社会形成能力」の具体的要素であるチームワークやリーダーシップ等を育むという視点で活動を組み立てることで、各領域（「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」）が有機的につながりをもち、また３年間を通した全体計画にも適切に位置づけることができるようになる。

（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する数学科の指導内容の例】

人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
数学的活動を例にして（第1,2,3学年を通して）		「A数と式」を例にして	「B図形」を例にして
数学における「説明し伝え合う活動」では，問題を考察する際，自己内対話に終始せず，他者に説明し伝え合いながら学習を進めることで，一人では気付かなかった新しい視点が得られたり，考えを質的に高めたりすることができます。 このような経験は，仕事をする上で基礎となるコミュニケーション・スキルの育成につながります。	数学的活動は，基本的に問題解決の形で行われます。 そこでは粘り強く考え抜くことが必要になり，成就感や達成感などをもとにして自信を高め自尊感情をはぐくむ機会も生まれます。子どもや若者の自信や自己肯定感の低さが指摘される中，「やればできる」と考えて行動できる力は，このような活動を通して得られると考えられます。	第１学年における文字の学習は，現実の世界における事象を数学の世界における関係として記述する手段として大きな意味をもちます。 この文字の学習により，連立二元一次方程式(第２学年)，二次方程式(第３学年)などの手段を得，考察の対象が広がるとともに，様々な事象の本質的な関係をより簡潔かつ明解にとらえることができるようになります。このような学習を通して，従来の考え方や方法にとらわれずに物事を前に進めていくために必要な力がはぐくまれます。	図形や空間についての学習では，第１学年で論理的な考察と論証及びそれを表現することへの関心や意欲を高め，第２学年では，論理的に筋道を立てて正しい推論ができるようにします。そして，第３学年では，図形に対する直観力や洞察力とともに論理的に考察し表現する能力を伸ばします。 このように，段階的にかつ目的を明確にして学習を進めることで，その良さを実感することができます。そして，将来，社会における様々な課題に取り組む際も，自ら段階的に目標を定め，進んでいこうとする態度を養うことができます。

（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

４　理科

①　教科の目標

・自然の事物・現象に進んでかかわり、目的意識をもって観察、実験などを行い、科学的に探究する能力の基礎と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な見方や考え方を養う。

（出典：文部科学省「中学校学習指導要領」2008年３月）

②　キャリア教育の取組み

・理科で学ぶ内容は日常生活や将来の実社会での生活と深く関連しており、理科の学習で養う科学的な見方や考え方は、将来の職業生活にも生かされるという意味で、理科の学習は、キャリア教育と密接につながっている。

・日常生活や将来の実社会での生活とのかかわりの中で、理科を学ぶ意義や有用性を実感できるよう、職業や今後の学習との関連に触れ、様々な課題に自立的に対応する力を育成していくことが大切である。

・中学校理科の目標に含まれる「自然の事物・現象に進んでかかわる」ことは、日常生活におけ

る科学の有用性を実感させる意味からも極めて重要であり、「探究する能力や態度」を身に付けることは、激しい変化が予想される社会の中で生涯にわたって主体的、創造的に生きていく上で不可欠であるだけでなく、生きる力の育成につながる。また、「観察、実験など」に際しては、計画を立て、他者と協力して取り組ませ、得られた情報を整理し課題解決に活用できるようにすることは、キャリア教育の視点からも重要である。「自然の事物・現象についての理解を深め」させるためには、日常生活や社会とのかかわりの中で、科学を学ぶ楽しさや有用性を実感しながら、生徒自らの力で知識を獲得し、理解を深めていくようにすることが大切であるし、「科学的な見方や考え方を養う」こととは、科学的な知識や概念を用いて合理的に判断するとともに、多面的、総合的な見方を身に付け、日常生活や社会で活用できるようにすることである。

（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する理科の指導内容の例】

分野／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
理科全般	○他者と協力・協働して，グループで観察・実験を行う。	○自己の役割を理解し，主体的に観察・実験に取り組む。	○自然の事物・現象に疑問を見出し，課題を設定し，計画を立てて課題を解決する。	○理科で学んだことや科学的な考え方が様々な職業や社会生活，その後の学習と関連していることを理解し，自らの生き方に生かす。
第１分野	○実験レポートの作成や発表により，互いの考えを理解し合う。 (例)身の回りの物質	○物質やエネルギーに関する事物・現象について，主体的に進んで学ぼうとする。	○自然の事物・現象に関する探究的活動を行い，分析・解釈して科学的に解決する。 (例)運動とエネルギー	○科学技術の発展と人間生活とのかかわりについて認識を深め，科学的に考えていこうとする。 (例)電流とその利用 化学変化とイオン 科学技術と人間
第２分野	○観察記録のまとめの作成や発表により，互いの考えを理解し合う。 (例)大地の成り立ちと変化	○生物とそれを取り巻く自然の事物・現象について，主体的に進んで学ぼうとする。	○自然の事物・現象に関する様々な情報を収集・理解して課題解決に活用する。 (例)気象とその変化	○生命を尊重する心情をはぐくむとともに，自然環境を大切にし，その保全に寄与した生き方をしていこうとする。 (例)動物の生活と生物の変遷 生命の連続性 自然と人間

（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

５　音楽

①　教科の目標

・①音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽への興味・関心を養い、音楽によって生活を明るく豊かなものにする態度を育てる。②多様な音楽表現の豊かさや美しさを感じ取り、基礎的な表現の技能を身に付け、創意工夫して表現する能力を育てる。③多様な音楽のよさや美しさを味わい、幅広く主体的に鑑賞する能力を育てる。

（出典：文部科学省「中学校学習指導要領」2008年３月）

②　キャリア教育の取組み

・音楽科では、生徒が音楽を表現したり鑑賞したりする活動や体験が、基礎的・汎用的能力とし

ての「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」等の育成につながると考えられる。

・音楽には、個と集団とのかかわりから豊かな感性や創造性が育つという教育力がある。音・音楽を通して心の内なるものを表現し合い、交流しあい、認め合う音楽活動は、まさにコミュニケーションそのものであり、個と集団とのかかわりあいが基軸になって展開されるという特性をもっている。

・豊かで創造的なかかわりが、共に学び合い、分かち合う力を育て、このような経験を通して身に付いたものが生きる力となって、生涯にわたって音楽とかかわるためのエネルギーになっていくと考えられる。

（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年3月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する音楽科の指導内容の例】

学年／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
第1学年	・声部の役割や全体の響きを感じ取り，表現を工夫しながら合わせて歌ったり，演奏したりする。 ・音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って聴き，言葉で説明するなどして，音楽のよさや美しさを味わう。 ・音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて，鑑賞する。		・歌詞の内容や曲想を感じ取り，表現したい思いや意図をもち，それを歌唱や器楽で表現する。 ・楽器の音の特性や奏法の特徴をとらえ，自分なりのイメージをもって表現する。 ・表現したいイメージをもち，音素材の特徴を感じ取り，反復，変化，対照などの構成を工夫しながら音楽をつくる。	・我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽の特徴から音楽の多様性を感じ取り，鑑賞する。
第2学年及び第3学年	・声部の役割と全体の響きとのかかわりを理解して，表現を工夫しながら合わせて歌ったり，演奏したりする。 ・音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを理解して聴き，根拠をもって批評するなどして，音楽のよさや美しさを味わう。 ・音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて理解して，鑑賞する。		・歌詞の内容や曲想を味わい，曲にふさわしい表現を工夫して歌ったり，演奏したりする。 ・表現したいイメージをもち，音素材の特徴を生かし，反復，変化，対照などの構成や全体のまとまりを工夫しながら音楽をつくる。	・我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴から音楽の多様性を理解して，鑑賞する。

（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

6　美術

①　教科の目標

・表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、美術の創造活動の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、感性を豊かにし、美術の基礎的な能力を伸ばし、美術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。

（出典：文部科学省「中学校学習指導要領」2008年３月）

②　キャリア教育の取組み

・中学校美術の表現の学習は、表したいことを基に、思考・判断し、表現する創造的な課題解決学習そのものである。また、感じ取ったことや考えたことなどを自分の感覚で自由に表現する活動は、自己を確認したり、新たな自分を発見したりすることでもある。特に、自己の内面を見つめることは、価値観を構築していく思春期の中学生にとって重要であり、肯定的な自己理解を促す機会になる。

・鑑賞の学習では、自然や身の回りの造形、美術作品などから良さや美しさを感じ取り、心を豊かにしていく。これは、知識を詰め込むものではなく、思いを巡らせながら対象との関係で自分の中に新しい価値観を作り出す創造活動である。その活動では、作品等に対する思いや考えを説明し合ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりすることで、自分一人では気付かなかった価値等に気付くことができるようにすることが重要である。

（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年3月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する美術科の指導内容の例】

学年／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
第1学年	・生活における美術の働きなどを感じ取る。 ・作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして，対象の見方や感じ方を広げる。	・自分の表したいことを具現化できるように表現の効果などを考えながら，計画を立てて表現する。	・表したい主題について，形や色彩，材料などを構成し，表現の効果を踏まえてどのように表現するのかなど構想を練る。	・作品が表している内容や，形，色彩，材料，表現方法などから，自分として根拠をもって読み取る。
第2学年及び第3学年	・感じ取った作品の良さや美しさなどの価値について，根拠を明らかにして自分の考えを述べたり，生徒同士で批評したりして，自分の気付かなかった作品の良さを発見する。 ・社会性や客観性を一層意識し，目的や条件，機能などを広い視野で総合的にとらえる。 ・内面や全体の感じ，価値や情緒などを感じ取り，外形には見えない本質的な良さや美しさなどをとらえる。	・材料や用具，表現方法の特性を効果的に活用するために，制作の順序や見通しをもって表現する。 ・制作の見通しをもちながら自分の表現意図に合う独創的な表現方法を工夫して表現する。	・生徒一人一人がイメージを広げ，表したい主題を形や色彩，材料などを客観的な視点をもって効果的に活用できるよう構想を練る。	・作者を取り巻く芸術の潮流や人間関係など一人の人間として人間性や生き方に触れるなどする。 ・美術を生活や社会，歴史などの関連で見つめ，自分の生き方とのかかわりでとらえ，鑑賞を深める。 ・主題に基づきながら作品の背景を見つめたり，自分の生き方とのかかわりでとらえたりする。

（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年3月）

７　保健体育

①　教科の目標

・心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。

（出典：文部科学省「中学校学習指導要領」2008年３月）

② キャリア教育の取組み

・「生活を健康で活力に満ちた明るく豊かなものにする」ことを究極の目標とする保健体育科においては、キャリア教育と密接に関連する多くの指導内容がある。

・保健体育科を通して育成する健康の保持増進のための実践力や体力は、一人一人のキャリア形成の基盤として極めて重要である。

・保健体育の中で、例えば、2012年度からすべての生徒が学習することになった武道の学習の過程で、防具や用具の準備や片付け、審判などの分担した役割を果たすことも、社会生活を過ごす上で必要な責任感を育てることにつながる。

・相手を尊重し合うための独自の作法や所作を守ること、仲間の学習の援助を通して仲間との連帯感を高めること等、武道の学習を通して身に付ける力は生涯にわたって生かされるものである。キャリア教育の視点から武道の指導を捉えることにより、これらの特質が一層生かされる。

（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年3月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する保健体育科の指導内容の例（武道に焦点を当てて）】

分野／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
体育分野	・審判の判定や勝敗の結果を受け止め，ルールやマナーを守ることや自分のことだけでなく共に学ぶ仲間に対して必要な支援をすることに積極的な意志をもつ。 ・話合いなどでグループの学習課題等についての意思決定をする際に，相手の感情に配慮して発言したり，仲間の意見に同意したりしてグループの意思決定に参画する。	・運動を通して，人の体や心の状態には個人差があることを把握する。 ・自己の体調の変化に気を配ったり，用具や場所の安全に留意したりする。 ・自己の体調の変化に応じて段階的に運動をしたり，用具や場所の安全を確認したりする。 ・健康や安全を確保するために，体調に応じて適切な練習方法を選ぶ。	・自己の課題に応じて，学習する技の合理的な動き方について改善すべきポイントを見付ける。 ・自己の課題に応じて，適切な練習方法を選ぶ。 ・提供された作戦や戦術から，自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選ぶ。 ・仲間に対して，技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘する。	・様々な運動において実生活で継続しやすい運動例を選ぶ。 ・運動を継続して楽しむための自己に適したかかわり方を見付ける。
保健分野	・異性の尊重，性情報への対処など思春期における適切な態度や行動選択について考える。 ・飲料水・空気，生活に伴う廃棄物の衛生的管理と人々の健康との関連を考える。	・身体機能の発達や発育。 ・発達の個人差などについて理解する。 ・精神機能の発達と自己形成，欲求やストレスへの対処と心の健康などについて理解する。	・生活行動・生活習慣と健康，喫煙・飲酒・薬物乱用と健康，感染症の予防などについて課題を発見し，解決方法を考える。 ・交通事故や自然災害による傷害の防止等の方策について考える。	・保健・医療機関の有効活用，個人の健康を守る社会の取組などについて理解を深める。
武道	・自分で自分を律する克己の心を表すものとして礼儀を守るという考え方があることを理解し，取り組めるようにする。（1．2年） ・投げ込みや打ち込みの相手を引き受けたり，運動観察などを通して仲間の課題を指摘するなど教え合ったりしながら取り組もうとする。（3年）	・体調の変化などに気を配ること，危険な動作や禁じ技を用いないこと，用具の安全や練習及び試合場所での自己や仲間の安全に留意することや，技の難易度や自己の技能・体力の程度に応じて技に挑戦する。（1．2年）	・自己の技能，体力の程度に応じた得意技を見付ける。 ・提供された攻防の仕方から，自己に適した攻防の仕方を選ぶ。 ・仲間に対して，技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘する。（3年）	・武道を継続して楽しむための自己に適したかかわり方を見付ける。（3年）

（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

８　技術・家庭

①　教科の目標

・生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術の習得を通して、生活と技術とのかかわりについて理解を深め、進んで生活を工夫し創造する能力と実践的な態度を育てる。
・技術分野：ものづくりなどの実践的・体験的な学習活動を通して、材料と加工、エネルギー変換，生物育成及び情報に関する基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、技術と社会や環境とのかかわりについて理解を深め、技術を適切に評価し活用する能力と態度を育てる。
・家庭分野：衣食住などに関する実践的・体験的な学習活動を通して，生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに，家庭の機能について理解を深め，これからの生活を展望して，課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる。

（出典：文部科学省「中学校学習指導要領」2008年３月）

②　キャリア教育の取組み

・技術・家庭科では、仕事の楽しさや完成の喜びを味わわせる等、充実感や成就感を実感させるとともに、学習内容と将来の職業の選択や生き方とのかかわりの理解にも触れる等、自ら課題を見いだし、解決を図る問題解決的な学習を一層充実させることが重要とされている。
・技術分野の学習は、工夫・創造の喜びを体験する中で、勤労観や職業観、協調する態度などを併せて醸成するものであり、それは、これからの社会で主体的に「生きる力」の育成を目指して展開されるものである。
・家庭分野の学習では、特に、中学生の時期は、生徒が生活の自立を目指す中で、人々に支えられて生活していることに気付くことや、自分も家庭生活を支える一員としての自覚をもち、生活をより良くしようとする態度を育成することが大切である。

（参考：文部科学省「中学校学習指導要領解説［ 技術・家庭編 ］」2008年7月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する技術・家庭の指導内容の例】

分野／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
両分野	○製作や実習等を通して協調性・責任感をもつ（自他の役割の理解と遂行）。	○仕事の楽しさや完成の喜びを味わう。 ○充実感や成就感を実感する。	○問題解決能力（生活を工夫し創造する能力）をもつ。 ○原因や課題を見付け，その課題を解決するために工夫する。	○学習内容と将来の職業の選択や生き方とのかかわりの理解に触れる。
技術分野	○技術が生活の向上や産業の継承と発展に果たしている役割や，環境との関係について考える。 ○情報モラルについて考える。	○緻密（ちみつ）さへのこだわりや忍耐強さなどを育てる。 ○技術を適切に評価し活用しようとする。	○目的や条件に応じて設計・計画できる。 ○情報手段を主体的に選択し活用する。 ○技術の適切な評価・活用について考える。	○技術にかかわる倫理観や新しい発想を生み出し活用しようとする態度をはぐくむ。 ○職業観や勤労観をはぐくむ。
家庭分野	○家族や社会の一員としての自覚や役割をもつ。 ○周囲の人々とのかかわりや人間関係の大切さを理解する。	○より良い家族・家庭や社会（の生活）をつくるために，現在自分ができることを見直し，さらに必要な力をつけて生活に役立てようとしている。	○生活を見直し，課題をもって活動を工夫し，計画を立てて実践する。	○家庭や地域で実践する意義に気付く。 ○家庭や社会の一員として，自己実現に向けて生活の自立をめざす。 ○環境に配慮した消費生活について工夫し実践する。

（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

９　外国語（英語）

①　教科の目標

・外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

（出典：文部科学省「中学校学習指導要領」2008年３月）

②　キャリア教育の取組み

・外国語（英語）科では、言語や文化に対する理解を深めたり、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成したりすることとともに、聞くことや読むことにおいて、話し手や書き手の意向を理解することや、自分の考え等を話したり書いたりすることを重視している。

・外国語（英語）の学習は、人間関係を基本にした言語活動から成り立っている。他者とのコミュニケーションを通して、自己理解や他者理解を深め、お互いを尊重しあう態度を育成していく。

・このような学習の積み重ねが、キャリア教育の充実を図るための、社会的自立や職業的自立を目指したその基盤となる「基礎的・汎用的能力」の育成につながる。

（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年3月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する外国語 (英語) 科の指導内容の例】

学年／能力	言語活動としての話題	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
第1学年	自分の気持ちや身の回りの出来事などの中から，簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるような話題を取り上げる。	＜聞くこと＞ ・まとまりのある英語を聞いて，概要や要点を適切に聞き取ること。 ＜話すこと＞ ・聞いたり読んだりしたことなどについて，問答したり意見を述べ合ったりすること。	＜聞くこと＞ ・質問や依頼などを聞いて適切に応じること。 ＜読むこと＞ ・伝言や手紙などの文章から書き手の意向を理解し，適切に応じること。	＜話すこと＞ ・与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。 ・つなぎ言葉を用いるなどの工夫をいろいろして，話を続けること。	＜読むこと＞ ・書かれた内容や考え方などをとらえること。 ＜書くこと＞ ・感想，賛否やその理由を書いたりすること。 ・聞いたり読んだりしたことなどについて，自分の考えや気持ちなどを書くこと。
第2学年	事実関係を伝えたり物事について判断したりした内容などの中から，コミュニケーションを図れるような話題を取り上げる。	発達の段階に応じた高度化			
第3学年	様々な考えや意見などの中から，コミュニケーションを図れるような話題を取り上げる。				

（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

10　道徳

①　教科の目標

・道徳教育の目標は、学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする。道徳の時間においては、以上の道徳教育の目標に基づき、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的実践力を育成するものとする。

（出典：文部科学省「中学校学習指導要領」2008年３月）

②　キャリア教育の取組み

・勤労観や職業観は、日常生活の中での役割や責任の遂行、個人の個性・能力・適性等の発揮、生計維持、規範の遵守等の職業倫理に対する考えや、職業や働くことそのものに対する人それぞれの価値観であるといえる。どのような職業に就き、どのような職業生活を送るかは、人がいかに生きるか、どのような人生を送るかということと深くかかわっている。道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の内容は、いずれも、人が社会的・職業的に自立し生きていく上で必要とされるものである。

・キャリア教育が目指す「基礎的・汎用的能力」の育成や、これらの能力育成を通した勤労観・職業観等の価値観形成のためには、その基盤となる自己の判断基準となる価値観形成が求められる。価値観は、道徳性の発達を促す道徳を通して道徳的価値観を自覚させることで再構築さ

れる。例えば、自己を見つめ自己を理解する、周囲とのより良い人間関係を築く、体験活動の意義や学びの価値に気付く等、道徳を通して醸成された価値観により、より良く生きようとする意欲や態度は、生徒自身の自発的、自律的な道徳的行為の原動力につながる。

（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年3月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する道徳の指導内容の例】

勤労観・職業観等の価値観			
人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
礼儀　2－(1) 思いやり　2－(2) 信頼，友情　2－(3) 異性理解　2－(4) 寛容，謙虚　2－(5) 感謝　2－(6) 権利，義務　4－(1) 公徳心，社会連帯 情報モラル　4－(2) 正義，公正公平 4－(3) 集団生活の向上，役割，責任　4－(4) 勤労の意義と尊さ，奉仕の精神　4－(5)	望ましい生活習慣 1－(1) 強い意志　1－(2) 自主・自律　1－(3) 理想の実現　1－(4) 自己理解，個性の伸長 1－(5) 生命尊重　3－(1)	生命尊重　3－(1) 自然愛護　3－(2) 人間の気高さ　3－(3) 家庭生活の充実 4－(6) よりよい校風の樹立 4－(7) 郷土の発展への貢献 4－(8) 伝統の継承と文化の創造への貢献　4－(9) 国際社会への貢献 4－(10)	強い意志　1－(2) 自主・自律　1－(3) 理想の実現　1－(4) 自己理解，個性の伸長 1－(5) 権利，義務　4－(1) 役割，責任　4－(4) 勤労の意義と尊さ 4－(5)

（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

11　総合的な学習の時間

①　教科の目標

・横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

（出典：文部科学省「中学校学習指導要領」2008年３月）

②　キャリア教育の取組み

・総合的な学習の時間においては、学習の成果から達成感や自信をもち、自分の良さや可能性に気付き、自分の人生や将来、職業について考えていくことが大切である。また、「自己の生き方を考える」ことが、「キャリア教育」の狙いでもある「社会的・職業的に自立するために必要な基盤となる能力や態度の育成」につながっていくものと考えられる。

・職業や自己の将来にかかわる課題を取り上げ、具体的な体験活動や調査活動、仲間との話合いを通して探究的に学ぶ機会をもつことは、生徒が自己の生き方を具体的、実際的なものとして考えていくことにつながる。このことは、自己の将来を力強く着実に切り開いていこうとする資質や能力、態度の育成において極めて重要なものである。

・中学校以降のキャリア教育推進において重要なのは、社会や経済の仕組みを知識として学ぶこ

とと体験を通して学ぶことの両面から、現実社会の厳しさも含めて、一人一人の将来に実感のあるものとして伝えていくことであると考えられる。このことからも、中学校における職場体験活動等の体験的な学習活動は、キャリア教育の視点から重要な役割を果たすものとして位置付けられる。

・進路の選択を迫られる場面を迎える義務教育修了段階である中学校において、働くことや職業を自分とのかかわりで考えることや、自己の将来を展望しようとすることは、自己の生き方を考えることに直接つながる重要な学習となる。職場体験活動等の自己の将来にかかわる体験活動は、社会人・職業人として自立できる人間を育てるキャリア教育に直接結びつく重要な学習である。

・総合的な学習の時間においては、単に体験活動を取り入れるだけでなく、問題の解決や探究活動に取り組むことを通して、自己を理解し、将来の生き方を考える等の学習活動が行われるようにすることが欠かせない。

（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年3月を基に作成）

中学校におけるキャリア教育の状況と課題

中学校におけるキャリア教育推進にはいくつもの課題がある。「勤労観・職業観の育成」が重視されるあまり、「キャリア教育＝職場体験」という考え方が根強く、職場体験が終わると今年度のキャリア教育は全て終了と捉える傾向がある。外部人材の活用では、組織として受け入れる手法が未だ十分に成熟しておらず、負担感のみが増大し踏み出せずにいる。

キャリア教育は、全教育活動を通じて社会人として必要な基礎的・汎用的能力を育成するものと認識されれば、校長の学校経営方針、キャリア教育の年間指導計画、教科指導、外部人材との協働 ･･･ 等は大きく変化し、各校でのキャリア教育は格段に前進させる。

キャリア教育推進には、教育活動に「つながり感」を持たせることが極めて重要と考える。学校行事や宿泊行事で３年間を見通したねらいを明確にし、学年行事に関連づけることでより大きな成果が期待できる。各教科指導では、人間関係形成能力や課題対応能力の育成を意図的に位置づけ授業改善を行うことで、幅広いキャリア教育の推進に結びつける。

外部人材との「つながり感」を生かす教育活動では、将来を見据えた生徒の大きな変容が期待できる。いくつかの学校では外部人材を活用し、授業や各種行事を協働で行うケースが見られる。学校経営の視点からも保護者、地域を含めた地域人材の教育参加は、教育の質を向上させるとともに、双方向で教育の当事者意識をもつことになり大きな役割を果たす。特に「職場体験」や「校内ハローワーク」等、地域人材の教育参加は、生徒のキャリアプランニング能力を育成し学校生活の見直しへとつながる。人材確保の分野では、それぞれの地域の実情に応じて、校内に進路指導主任を中心とする折衝チームを組織するなど、各校の工夫が考えられる。外部人材の指導力や専門的な業務経験を教育に生かすため、いかに授業や学校行事に結び付け教育効果を上げていくのか、正に各校の手腕が問われている。

諏訪台中学校校長　清水　隆彦

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する総合的な学習の時間の
学習において育てようとする資質や能力及び態度の例】

分野／能力	人間関係・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
学習方法に関すること	・相手や目的，意図に応じて，論理的に表現する。	・複雑な問題状況における事実や関係を把握し，自分の考えをもつ。	・複雑な問題状況の中から適切に課題を設定する。 ・目的に応じて手段を選択し，情報を収集する。	・学習の仕方や進め方を振り返り，学習や生活に生かそうとする。
自分自身に関すること	・自らの行為について責任をもって意志決定する。	・自らの生活の在り方を見直し，日常的に実践する。	・目標を明確にし，課題の解決に向けて計画的に行動する。	・自己の将来を考え，夢や希望をもつ。 ・目標を明確にし，課題の解決に向けて計画的に行動する。
他者や社会とのかかわりに関すること	・異なる意見や他者の考えを受け入れ尊重する。 ・互いの特徴を生かし，協同して課題を解決する。	・互いの特徴を生かし，協同して課題を解決する。	・課題の解決に向けて社会活動に参画する。	・環境の保全を考えて行動する。

（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

12　特別活動

①　教科の目標

・望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。

（出典：文部科学省「中学校学習指導要領」2008年３月）

②　キャリア教育の取組み

・特別活動は、生徒が学級集団をはじめとする学校内の様々な集団に所属し、その中で互いに理解し合い、高め合い、個人と個人、個人と集団、集団相互が互いに作用し合いながら、集団活動や体験的な活動を進め、それぞれの生徒が全人的な発達を遂げ、また、所属する集団自体の改善・向上を図っていくものである。

・特別活動は、将来において個人が社会的な自己実現を図るために必要とされる資質の育成、さらに自己の所属する様々な集団に所属感や連帯感をもち、集団生活や社会生活の向上のために進んで力を尽くそうとする態度や能力を養うこと、そして、人間としての生き方の自覚と自己を生かす能力の育成を目指すものである。

・学級活動における「学業と進路」は、キャリア教育の中核的な実践の場としての役割を果たす。また、学級活動の他の内容も、キャリア教育に深く関連し、生徒会活動や学校行事もキャリア教育として重要な内容を多く包含している。

・「なすことによって学ぶ」ことを方法原理とする特別活動の各内容に、着実に取り組み、今まで以上に学校教育全体で学んだキャリア教育に関する知識を統合し、深化させ、体験的に実践

していくことが、キャリア教育実践の推進に向け、特別活動に強く求められている。
（参考：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年3月を基に作成）

【「基礎的・汎用的能力」の育成に特に関連する特別活動の指導内容の例】

活動／能力	人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
学級活動	・社会の一員としての自覚と責任 ・望ましい人間関係の確立 ・男女相互の理解と協力 ・食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成 ・学級の組織づくりや仕事の分担処理	・自己及び他者の個性の理解と尊重 ・思春期の不安や悩みとその解決 ・心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成 ・性的な発達への適応	・学級や学校における生活上の諸問題の解決 ・学校における多様な集団の生活の向上 ・進路適性の吟味と進路情報の活用	・ボランティア活動の意義の理解と参加 ・学ぶことと働くことの意義の理解 ・自主的な学習態度の形成と学校図書館の利用 ・望ましい勤労観・職業観の形成 ・主体的な進路の選択と将来設計
生徒会活動	・好ましい人間関係を深めるための活動 ・学校生活における規律と良き校風の確立のための活動 ・異年齢集団による交流	・生徒の教養や情操の向上のための活動 ・学校行事への協力	・身近な問題の解決を図るための活動 ・生徒の諸活動についての連絡調整	・環境の保全や美化のための活動 ・ボランティア活動などの社会参加 ・生徒会の計画や運営
学校行事	・共に助け合って生きることの喜びの体得 ・校外における集団活動にて教師と生徒及び生徒相互の人間的な触れ合いや信頼関係を経験	・安全な行動や規律ある集団行動の体得 ・責任感や連帯感の涵養 ・生涯にわたり，文化や芸術に親しむための豊かな情操の涵養	・集団のきまりや社会生活上のルール，公衆道徳などの体験 ・前年度の計画の見直しと課題解決のための立案	・勤労の尊さや創造することの喜びの体得 ・職場体験などの職業や進路にかかわる啓発的な体験 ・ボランティア活動などの社会奉仕の精神を養う体験

（資料出所：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」2011年３月）

◆第２節　キャリア教育の授業開発

中学校のキャリア教育の中心になる科目は、特に「特別活動（学科活動）」、「総合的な学習の時間」及び社会「公民的分野」である。

１　「特別活動（学級活動）」の指導要領及びその解説

⑴　目標

・学級活動を通して，望ましい人間関係を形成し，集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し，諸問題を解決しようとする自主的，実践的な態度や健全な生活態度を育てる。

⑵　内容

・学級を単位として，学級や学校の生活の充実と向上，生徒が当面する諸課題への対応に資する活動を行うこと。

・学業と進路

ア　学ぶことと働くことの意義の理解

ウ　進路適性の吟味と進路情報の活用

エ　望ましい勤労観・職業観の形成

オ　主体的な進路の選択と将来設計

・生徒が、自己の将来に夢や希望を抱き、意欲的かつ主体的に学習に取り組むとともに将来の生き方や進路に関する体験を得たり、情報の活用を図ったりしながら、自己の個性や学習の成果を生かす進路を自らの意志と責任で考え、選択していくことは、中学生にとって極めて重要なことである。また、生徒が、将来直面するであろう様々な課題に柔軟かつたくましく対応し、社会人・職業人として自立していくためには、生徒一人一人が，学ぶこと、働くこと、そして、生きることについて自己の問題として真剣に受け止め、それぞれの深い結びつきを理解していくことが必要である。

ア　学ぶことと働くことの意義の理解

具体的には、充実した人生と学習、学ぶことや働くことの楽しさと価値、学ぶことと職業などについて題材を設定し、保護者や卒業生など自分の身のまわりの人、働きながら学んでいる人、地域の職業人、あるいは生涯学習に取り組む人々などの体験談などを取り入れながら、自分なりの考えをまとめ、発表したり、話し合ったり、ディベートを行ったりする活動などが考えられる。

職場体験と関連させ、それらの事前，事後の指導として、生活や社会、職業や仕事、将来の進路などについて考えさせ、話し合う取組もある。さらに、卒業時期には、今までの学びを振り返り、社会的自立と自己実現を深めていく活動の展開なども考えられる。ウ　進路適性の吟味と進路情報の活用

生徒が自分のよさに気付き、伸ばそうという意欲がもてるよう、多面的に自分自身を見つめ自分を知る活動、友人の理解を通して自分を知る活動、そして職業適性などから客観的に自分を知る活動などが考えられる。また、そのような自己の個性の理解に基づいて、自分のよさを発揮し、個性を伸ばす進路を探索するために、当面する進路に関する情報を収集し、整理して、自分や友人が活用できる資料としてまとめる活動などが考えられる。具体的には、自分のよさ

の発見、職業と適性などについて題材を設定し、自分の興味・関心、得意な教科の学習や活動、性格や行動など多面的に自分自身を見つめたり、生徒が互いのよさを見つめ合い、確かめ合ったりする活動の展開、あるいは職業適性検査等を活用して、個性を生かす職業について考える活動の展開が考えられる。また、生き方を学ぶ、進路に応じた学習機会の選択、学校調べなどについて題材を設定し、地域の社会人や職業人の講話を聞いたり、勤労や奉仕の体験を通して、生き方や進路の多様性を理解する活動の展開、あるいは上級学校を訪問、見学したり、体験入学をして，その結果をまとめて発表したりする学習の展開が考えられる。

エ　望ましい勤労観・職業観の形成

自己と社会とのかかわりを考える中学生の時期をとらえ、生徒が、様々な社会的役割や職業及び職業生活について理解するとともに、人は何のために働くのか、なぜ働かなければならないのかを考え、将来、職業人、社会人として自立し、生きがいのある人生を築こうとする意欲・態度をもつことができるよう、内容を取り上げることが大切である。具体的には、自分の役割と生きがい、働く目的と意義、身近な職業と職業選択などの題材を設定し、調査やインタビューをもとに話し合ったり、発表やディベートを行ったりするなどの活動の展開が考えられる。また、学校行事などとして実施する地域の職業調べや事業所・福祉施設等における職場体験や介護体験、あるいは職業人や福祉団体関係者を招いての講話等との関連を図りながら、それらの事前。事後の指導として、調査、話合い、感想文の作成、発表を行うなどの活動の展開も考えられる。

オ　主体的な進路の選択と将来設計

将来の生活における職業人、家庭人、地域社会の一員などとしての役割や活動及びその変化を知り、生徒が将来の生活を具体的に描いてみる活動や、将来設計を進路計画として立案する活動などが考えられる。また、進路計画の実現を目指して、生徒が、卒業後の進路選択の問題を自分自身の課題として受け止め、自ら解決するために、例えば、高等学校進学の志望校選択などに当たって何を知り、どのように考え、いかに行動すべきかなどについて検討する活動なども考えられる。具体的には、自分の夢や希望、人生と生きがい、３０年後の私などについて題材を設定し、地域の職業人や福祉団体関係者の講話と感想文の作成、発表、話合いといった活動の展開、ライフプランの作成や進路計画を立案し、発表する活動の展開などが考えられる。特に、３年生の時期にあっては、志望校・希望職業の選択、進路の選択と私の悩みなどについて題材を設定し、志望校の選択について、進学目的の明確化、目的実現のための選択肢（各学校・学科の特色など）の理解、各選択肢で求められる選択の条件や必要な努力についての理解、選択理由の明確化、選択の結果とその受け止め方など、選択のためのスキルを学ぶ活動の展開なども考えられる。

（参考：文部科学省「中学校学習指導要領［特別活動］」２００８年３月及び
「中学校学習指導要領解説」２００８年７月を基に作成）

２　中学校「総合的な学習の時間」の指導要領及びその解説

⑴　目標（再掲）

・横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

⑵　内容

・育てようとする資質や能力及び態度については、例えば、学習方法に関すること、自分自身に関すること、他者や社会とのかかわりに関することなどの視点を踏まえること。

・職業や自己の将来に関する学習を行う際には、問題の解決や探求活動に取り組むことを通して、自己を理解し、将来の生き方を考えるなどの学習活動が行われるようにすること。

→「働く人から学ぼう」という単元であれば、生徒は身近で働く人を探そうとする。この場面では、身の回りで働いている人を探し、直接会って話を聞こうとする。また、家族の働く姿からその意味を考えようとする。ここで生徒は、身の回りにはたくさんの職業があることや多くの人が熱心に働いていることに気付くであろう。また、失礼のない電話連絡の方法を身に付けたり、正式に依頼状を出す方法を学んだりする。

→働く人への関心が高まると、生徒の目的は、実際に働いてみたいと考えるようになる。ここでは、実際に現場に出かけ、働くことを実体験することが重要である。見学するだけでなく、仕事を受け持ったり、仕事を手伝ったりする。そして、働く人の思いや願いについて考えさせることが重要である。必要に応じて、インタビューしたり、話を聞いたりして、働くことの意義や満足感、達成感を実感することも大切である。そのためにも、事前準備を十分に行い、目的を明確にして職場体験活動を行うことが求められる。また、実際に体験できない職業や身近にはない職業について考えることも大切であり、教師が必要に応じて資料を提供し、生徒の視野を広げるように心がけることも必要である。

→職場体験活動を終えると、生徒は互いの体験の様子を知りたいと思い、どのような職場で、どのような体験をしてきたのかを情報交換しようとする。互いの体験の様子を交流する中で、社会には多様な仕事があることに気付く。また、社会の仕組みや一つ一つの職業が大切な役割を果たしていることにも気付く。このことが、働くことの意義を理解することや自分の将来に対する夢や可能性を抱くことにつながる。このような生徒の変容を促すためには、社会に出て働くことの意味を考える講演会などを実施することが考えられる。誠実に働く人の姿や仕事にかける情熱を知ることで、それぞれの生徒が出会った人の思いや願い、夢や生きがいをはっきりと捉えられることにつながる。

（参考：文部科学省「中学校学習指導要領 [総合的な学習]」
2008年３月及び「中学校学習指導要領解説」2008年７月を基に作成）

３　中学校社会「公民的分野」の学習指導要領及びその解説

⑴　目標（再掲）

・現代の社会事象に関する関心を高め、様々な資料を適切に収集、選択して多面的・多角的に考察し、事実を正確に捉え、公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる。

⑵　内容

・社会生活における職業の意義と役割及び雇用と労働条件の改善について、勤労の権利と義務、労働組合の意義及び労働基準法の精神と関連付けて考えさせる。

→職業の意義や雇用などについては、それが家計を維持・向上させるだけでなく、個人の個性を生かすとともに、個人と社会とを結び付け、社会的分業の一部を担うことによって社会に貢献し、社会生活を支えるという意義があることについて考えさせる。

→家計を維持・向上させる上で、雇用と労働条件の改善が必要であることについて気付かせ、

産業構造の変化や就業形態の変化、「現代日本の特色」についての学習などと関連付けながら考えさせることが大切である。

→勤労が国民の権利であり義務であることや職業選択の自由が保障されていることと関連付けて考えさせるとともに、正しい勤労観や職業観の基礎を培うことが必要である。

→労働条件の維持・改善及び経済的地位の向上を図ることを主たる目的として労働者が自主的に組織する労働組合の意義や労働基準法が労働者が人たるに値する生活を営むための最低の基準を定め、労働者を保護しようとしていることと関連付けて考えさせることが必要である。

（参考：文部科学省「中学校学習指導要領 [社会：公民的分野]」2008年３月及び「中学校学習しょ指導要領解説　社会編」2008年７月を基に作成）

４　授業のテーマ例

① 学ぶことと働くことの意義の理解
② 進路適性の吟味と進路情報の活用
③ 望ましい勤労観・職業観の形成
④ 主体的な進路の選択と将来設計
⑤ 総合的な学習の時間

Part 1

中学校の部

第5章

キャリア教育の実践と提案
（アクティブ・ラーニングの実践）

キャリア教育では、社会的・職業的自立の基盤となる基礎的・汎用的能力を育成するとともに、労働市場の流動化や知識・技能の高度化に対応し、実践的で専門性の高い知識・技能を、生涯を通じて身に付けるための教育が行われる。そうした教育の目的を達成するために行われる授業の方法として、次のようなものが挙げられる。

1　生徒が主体となる授業形式（アクティブ・ラーニング）

①　アクティブ・ラーニング

・アクティブ・ラーニングとは、伝統的な教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法をいう。学習者が能動的に学ぶことによって、後で学んだ情報を思い出しやすい、あるいは異なる文脈でもその情報を使いこなしやすいという理由から用いられる教授法である。

（参考：中教審大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（審議まとめ）2012年３月を基に作成）

②　アクティブ・ラーニングの内容・種類

・アクティブ・ラーニングには、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、グループ・ワーク等を行うことでも取り入れられる。
・生徒が参加する授業形式としては、ワークショップ、チュートリアル等があり、生徒が体験する授業形式としては、フィールド活動（フィールドワーク）、教室でもできる体験等がある。
・体験学習には、生徒を実体験によって学ばせる学習方法だけでなく、生徒の過去の経験や知識と結びつけて考えさせる経験主義的な学習方法もある。

2　アクティブ・ラーニングの内容・種類

①　ワークショップ

・講師や教員から一方的に話を聞くのではなく、参加者が主体的に論議に参加したり、言葉だけでなく身体や心を使って体験したり、相互に刺激し合い学びあう、グループによる学びと創造の方法

（出典：中野民夫『ワークショップ』ii頁岩波新書2001年）

②　チュートリアル

・チューターと呼ばれる指導教師と生徒が一対一または一対少人数で行う個別の指導法。通常、週１回程度の頻度で定期的に設けられることが多く、主として学習指導が中心であるが、生活全般のアドバイスなども行われることがある。

（出典：今野・新井・児島編（冨田福代執筆）『新版学校教育辞典』教育出版2003年）

③　ロールプレイ

・現実に起こるであろう場面を想定し、複数の人がそれぞれの与えられた役割（ロール）を演じて擬似的な体験を積み、その事象が実際に起こった時に適切な対応ができるようにするための方法である。
・解決すべき課題について、問題場面の状況を設定し、登場人物の役割を演じる中で、役割としての立場を理解したり、気づかなかった問題点を発見する等、現実の場面に対処する問題解決能力を身に付けることができる。その効果として、問題場面に対する洞察力が高まり、知識としての理解だけでなく、共感的な理解ができるようになり、自発性や自主性、創造力が高まることが期待できる。

④　グループワーク

・生徒同士のコミュニケーションを重視し、生徒の自律的な知識構築を授業の目的とする場合に適しているとされる方法。

・キャリア教育において、グループワークは、ソーシャルスキルの中核ともいえるコミュニケーションスキルの重要性を体験的に理解する方法として重要な位置を占めている。

・グループワークを行う際、担当講師は、生徒の自発的な行動を待つだけでなく、積極的・能動的な働きかけを行うことが求められる。

・生徒の場合、コミュニケーションスキルが十分でない場合が多いため、グループワークを実施する際には、導入（インストラクション）、ワーク（エクササイズ）、振り返り（シェアリング）等の各場面で、配慮が求められる。

ⅰ導入（インストラクション）：エクササイズのねらいや内容、条件、留意点などを丁寧に説明することであり、参加への理解を求め、参加へのモチベーションを高めるのを目的とする。これは、メンバーのリーダーに対する信頼感やメンバー相互の信頼感および自己発見を促進する。

ⅱワーク（エクササイズ）：体験学習の課題のことであり、本音と本音の交流を促進する誘発剤（触発する素材）である。エクササイズには、自己理解、自己受容、自己表現・自己主張、感受性、信頼体験、役割遂行という６つのねらいがあり、メンバー相互の本音と本音の交流を通して感情、思考、行動という３つの変容をめざす。

ⅲ振り返り（シェアリング）：メンバーがエクササイズに取り組んで感じたことや気づいたことを共有することであり、１つないし複数のエクササイズを展開した後で行う平均10分から15分程度の「シェアリング（ショートシェアリング）」と、１セッション（約90分から２時間）全体をあてる「全体シェアリング（ロングシェアリング）」に区別される。構成的グループ・エンカウンターの中で、エクササイズと同じかそれ以上の比重を持つもので、エクササイズと補完的な関係にある。

（参考：國分康孝・片野智治『構成的グループ・エンカウンターの原理と進め方』
108頁以下誠信書房2001年を基に作成）

⑤　ケーススタディ

・現実に起こり得る問題や実際に起こった問題等を参考に教材として狙いを明確にした事例を作成して、生徒に提示し、問題点を分析させ、状況の把握、原因の分析、解決策の検討、結果の予測等を考えさせる学習方法である。

・結論そのものよりも、結論に至る過程における討論に重点がおかれ、現実の場面で求められる分析力、判断力、課題解決能力、役割遂行能力等を体験的に養うシミュレーション的学習である。

３　グループワーク・ファシリテーション

⑴　グループワークの意義

・学習は、本来、学習する者が自ら発し、自らが活動して行うものであるが、講義形式による知識を注入される学習方法では、学習者は受け身のままで主体的にはならず、学習者個々の個性的な思考はおしならされたままである。これに対し、グループワークは、注入され、承るだけの学習を、学習者の活動として主体化し、学習者相互のやり取りによって一層活性化することに役立つ。

・グループワークは、メンバー相互の話し合い、双方向での関心の交流を通して、参加者全員が持つ経験や背景を共有させることにより、課題の解決を図ったり、相互の共感を共有すること

によって学習、動機づけ、必要な態度の形成に至ることを目的とする。

・グループワークは、言語的なコミュニケーション、活動、人間関係、集団内の相互作用等を通して、メンバー一人ひとりが成長することを目的とするが、とりわけ、グループ独自のダイナミクスを活用することで、メンバーの人格的な発展や思考の発展・課題の解決等に繋げることができる。

・グループワークで求められるコミュニケーション能力、メンバーが役割を分担した上で相互に協力・協働して課題に取り組む姿勢、人の話を聴く力と自分の意見を述べる力、自分の意見を主張する力と他人の意見を受け入れる力、決められた時間内に課題を解決して答えを出す力等は、生徒が社会に出てから活動するために必要な力である。

⑵ グループワーク運営の留意点

・グループワークは、次のように行う (例)。

①目標の設定と提示：グループワークを実施する際にもっとも重要なことは、何のために行うのか、すなわちグループワークの目標（教育目標）が明確になっていることである。
目標（教育目標）は、一般教育目標（グループワークの成果として得られる知識・結論）と行動目標（グループワークが終了した段階で、何をどこまでできるようになっているか）の両面から示す。
ワークの最後にメンバーに発表させる場合には、どのような形（スタイルや時間）で発表させるかも伝えておく。

②資料の配付と確認：グループワークで使用するシート、資料等を配付し、どのように用いるか、個人で使用するものとグループで使用するもの、完成させるものや提出するものなど、ワークの中で行うべき事項を明確に指示して、メンバーの理解を得る。

③グループメンバーの決定：各グループのメンバーを決める。グループメンバーの決め方は、たとえば、近くの席にいる人をまとめる、じゃんけんや番号順などの偶然的な要素で決める、友人や顔見知りなどをまとめる等の方法の中から、ワークの内容と目的に応じて決める。

④環境の設定：各グループがワークをする場所を指定し、必要があれば机・椅子の配置を変えるとともに、グループメンバーを移動させる。誰が、どこに移動するか、鞄等の荷物をどうするか等を明確に指示し、時間を取られないように注意する。

⑤役割の決定：グループメンバーの中で、それぞれが担当する役割（司会、書記、タイムキーパー、発表者等）を決めさせる（役割の決め方も指示する)。

⑥時間とルールの説明：グループワークを実施する時間（終了の時刻)、その時間内にやるべきこととそれまでに作り上げるべき成果物の内容を説明する。
グループワークを行う際にメンバーが守るべきルールを告げる。

⑦話し合いの開始：アイスブレイク（グループメンバーが相互に知らない場合には、ウォーミングを兼ねた自己紹介等）を行って、グループメンバーが打ち解けあい、自由に意見を出し合える和やかな雰囲気を作る。

⑧話し合いの展開：グループ全体に気を配るとともに、個別のグループの状況にも配慮する。特に、人任せや不参加の行動が見られないかを注視し、必要に応じて対応する。
時間管理（進行管理）に留意し、必要に応じて、参加者に経過時間 (残り時間) 等を告知する等して注意喚起をする。

⑨話し合いの終結：全グループが決められた時間までに、決められたことを実行できるように導いていく。

⑩成果の発表：各グループから、討論の結果や経過等を発表させる。グループの数が多いと同じような発表になるので、やり方を工夫する。
各グループが発表する時間の管理に留意する。
発表の際、講師は発表に耳を傾け、結果に対しては、他のグループからの質問を受けるだけでなく、講師からの肯定的な評価と改善点を示すなどして、必ずフィードバックする。
⑪振り返り：各グループの発表に対する総評として良かった点、改善すべき点を告げるだけでなく、グループワークのやり方についても、同様の視点から講評する。全体として、グループワークの目標が達成されたか(目標にどの程度近づくことができたか)についても説明する。
⑫発展学習：今日の成果をこれからの学習活動、課外活動、自分の生活などにどのように活かしていく（役立てていくことができる）かを考えさせる。

⑶ グループワーク・ファシリテーションの意味と重要性(グループワークにおける担当者の役割)

・グループワークを通じて生徒が学ぶ場合、グループワークを担当する教員の役割は、メンバーの学習活動を促進する役割をもつ「ファシリテーター」である。
・ファシリテーターは、グループワークの目標を達成する方向に向けてグループメンバーの話し合いを促進する機能を果たすために、情報提供や専門的介入を行う。
・ファシリテーターは、グループメンバー全員の信頼を得られるように努めるとともに、常に中立的な態度を保ち、グループメンバー全員に対して関心を持ち、グループワークを公正に進行するためのリーダーシップを発揮しなければならない。

（参考：木村周『キャリア・コンサルティング理論と実際』
318頁雇用問題研究会2010年を基に作成）

⑷ グループワークリーダー（ファシリテーター）の役割

①開始に当たって、グループメンバーを紹介し（自己紹介でも良い)、グループワークの目標を告げる。
②グループメンバー全員がグループワークに参加するように配慮する。
③グループメンバーに向かって質問、応答、介入をしたりすることによって、全体の話し合いが目標に向かうように促進する。同時に、グループメンバーの連帯意識を強化する。
④グループワークの目標に関連する情報を可能な限り明確にしておく。そのためには、あらかじめ目標達成に必要な情報の範囲を決め、用意しておくことが必要である。
⑤可能な限り、グループメンバー自身に必要な情報提供をさせる。
⑥グループメンバーが持っている知識や経験を可能な限り引き出していくようにする。
⑦答えを示すのではなく、グループメンバー自身で考えるように仕向けていく。
⑧グループメンバー全員の感情の動きに注意し、発言を引き出す。
⑨リーダーシップ、自己開示、適切なインストラクション、シェアリング、抵抗への対応、介入等、必要となるグループ・エンカウンターのスキルを行使する。
⑩必要に応じて、話し合いの論旨を明確にし、派生的な話題、拡張的な話題等、目的から逸脱・乖離した内容に時間を費やさないように介入する。
⑪リーダーとして、個人的な意見や価値観を強制したり、グループの意向に逆らって結論を強制したりすることがないように注意する。
⑫グループワーク全体の進行（時間、話し合いの内容、グループメンバーの参加、目標の達成度合等）を注視し、評価する。

（参考：木村周『キャリア・コンサルティング理論と実際』
318頁雇用問題研究会2010年を基に作成）

⑸　グループ・ワークにおける教員のファシリテーターの機能

・グループワークのファシリテーターとして、生徒の学習活動を促進するという観点から、担当する教員に求められることは、次の通りである。

①原則として「聞き役」に徹すること

②必要に応じて生徒の討論を促すこと（理解を深めることを促す）

③フィードバックのためのコメントを行う（良い点を誉める、改善点について考えることを促す）こと

・グループワークの最後に行われる「振り返りとまとめ」では、グループワークに参加した生徒の自己評価を支援するために、良かった点を積極的に誉めること、良くなかった点をどう改善するかについて考えるように促すことが求められる。これらの行為・言動等によって、生徒が課題を発見し問題を解決する能力を促進したり、ディスカッションする能力を伸ばすことができる。

・グループワークに参加した生徒に対して助言をする際の方法の一つに、「YNY 型」がある。これは、相手に対する自分の評価を相手に受け入れてもらう方法として有効とされているもので、「Y（Yes）」は、「肯定的な評価や発言」であり、「N（No）」は、「否定的な評価や発言」である。「YNY 型」とは「Y → N → Y」のことであるから、まず（どんなに些細なことでかまわないので）何か良かったことを指摘し、次に不十分だったことや改善しなければならないことを指摘し、最後にもう一度肯定的な評価や発言をして締めくくるやり方である。

・グループワークに参加した生徒を肯定的に評価するときは、名前を挙げるのも良いが、良くなかったことや改善すべきところを指摘する際は、個別の名前は挙げないで一般化して述べる方が良いとされる。

・時間の管理（進行の管理）に十分配慮して、授業時間内に終了するように気を付ける（生徒は、次の授業の準備をしなければならないので、授業終了時刻までには、必ず終了するのが鉄則である）。ワークの時間配分と進捗に気を配り、決められた時間までに結果・結論が出るようにする。振り返りとまとめの時間は必ず確保して実施し、学習効果や生徒の満足度の点で問題がないようにする。

（参考：佐藤浩章編『大学教員のための授業方法とデザイン』
87頁以下玉川大学出版部2010年を基に作成）

⑹　グループワークにおけるファシリテーターの技法の例

・グループワークを円滑に実施し、効果を高めるとともに、参加する生徒の満足度を高めるために、次のような技法がある。

事　柄	取扱い技法の例
グループメンバーが発言しようとしない場合	しばらくそのままにしておき、他のグループメンバーがどのように発言しているかを観察する時間を与える。他の参加者の発言に反応する行動が見られたら、指名して答えやすい質問を行い、発言を促す。 グループワークに抵抗を示したり、流れに乗れなくて参加しないグループメンバーがいる場合には、グループワークの狙いや内容、条件、留意点などを説明した後で質問したり、参加の仕方のモデルを示したりして、速やかに抵抗を取り除いたり、参加意欲を高めておく。
発言しすぎるメンバーがいる場合	「今の○○さんの発言について、皆さんはどう思いますか」等、他のグループメンバーに質問を投げかけることによって、次の発言を封じる。 その発言を無視して、他のグループメンバーに発言を求めるようにする。それでも発言を止めない場合は、「他の人の意見も聞いてみたいので」と告げ、明確に阻止する。
話題が逸脱したとき	そのグループワークの目的を再び告げて、確認することによってグループメンバー全員の関心と注意を本題に戻す。 「この話は、私も面白いと思いますが、残り時間も少なくなっているので、～という本来のテーマに戻って議論を進めましょう」。
理解を深めることを促すとき	「今の～という発言について、誰からも意見がでなかったようですが、私にはよくわからなかったのですが‥‥」 「今の～という発言について、質問はありませんか」 発言の少ないグループメンバーがいる場合には、その人に対して「今の問題について、○○さんはどう思いますか」と発言を促す。
特定の参加者に対して集中攻撃が生じたとき	反対のための反対である場合には、話題を転じる等の方法を取ることでグループメンバーの注意を別の事項に集中させるようにする。 正当な理由に基づいてなされたものであり、かつ、建設的な内容のものである場合には、悪意があってなされたものでないことが明確な限り、続行させてしばらく成り行きを見守る方が、良い結果をもたらすとされる。
良い点を誉めるとき	このグループは、メンバーの発言が多くて良いですね。この調子でいきましょう。 司会進行役の○○さんの司会は、方向付けもきちんとできていたし、タイムキーパーとしても上手でした。 ○○さんの～という意見は、良かったです。あれで、議論の道筋が明確になったと思います。 前回のワークで指摘した改善点が、今回のワークではきちんと直されていました。
改善点について話すとき	議論しているだけだと筋道が分かりにくいので、図に示して書いてみたらどうでしょう。 今回は、前回のワークと比べて、議論があまり盛り上がらなかったようだけど、どうしてだと思いますか。 時間をもっと有効に使って、決められた時間までに結論を導き出すためには、どうしたら良いと思いますか。グループメンバー全員で、ちょっと考えてみてください。

（参考：木村周『キャリア・コンサルティング理論と実際』321頁雇用問題研究会2010年を基に作成）

4　グループワークの実践

・その職業の人は、どんな仕事をしているか（職業と課業）を分析することで、職業や働くことに対する興味を引き立てる。

・中学生のなりたい職業から、それぞれの「職業」では、どのような「仕事」があるのかを考えて、「職業」が、様々な「仕事」から構成されていることを学ぶ。

・「職業」の例

①保育士・幼稚園の先生

②パティシエ（ケーキ屋）

③調理師・コック

④トリマー
⑤キャビンアテンダント（客室乗務員）
⑥タレント
⑦音楽の先生
⑧ファッション・デザイナー
⑨美容師
⑩消防士
⑪プロスポーツ選手
⑫ゲームクリエーター

キャリア・コンサルティングの６領域とキャリア教育

キャリア・コンサルティングの６領域として知られている「自己理解」「職業理解」「啓発的経験」「意思決定」「方策の実行」「新たな仕事への適応」は、キャリア教育でも改めて重要な考え方となります。そもそも、これら６領域は、従来の進路指導・職業指導で重要だった考え方であり、それが応用され拡張されたものが、キャリア・コンサルティングの６領域となったという経緯もあります。

したがって、キャリア・コンサルティングの観点からは、やはり「自己理解」をベースにキャリア教育を組み立てていくというのが、最もオーソドックスで標準的な考え方になるでしょう。キャリア教育の主たる対象層である10代の子供達はもともと自分自身に関心を持ちやすい年代であり、自分自身の問題や悩みといったものに一定の解決をつけておかなければ一歩も前に進めない年代でもあるからです。

ただ、一方で、だからこそ「自己理解」を一定程度深めた後は、いかに「職業理解」「啓発的経験」「意思決定」へと気持ちを向かわせるかも、この年代のキャリア教育的な介入の大きなポイントになります。一度、「自己理解」にどっぷりと沈み込ませて、そこで子供達が得たほんの僅かな火種のような将来への気持ちを、今度はぐるりと反転させ、現実の世界へと引き上げ、実際の進路選択へ向かわせていく必要があります。この相反する方向性をもつ２つのプロセスを巧みにマネジメントし、そのための仕掛けを作り、10代の子供達に分かりやすく提示していくこと。こうした取り組みにはキャリア・コンサルタントが日頃培ってきたスキルや知識が十分に役立つはずです。

キャリア・コンサルタントとしての技能を、学校という新たな場面で、先生方の要望に応えながら、できるだけ活かしていくということが、今現在、キャリア・コンサルタントに大きく期待されているといえるでしょう。

労働政策研究・研修機構　主任研究員　下村　英雄